

よく分からないけど頑
張るしかない！

pompomw

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

齋藤雄介は、ある日目が覚めると異変を感じた！

そんななかでも自分が自分として頑張るお話（多分、おそらく、maybe）

はじめて小説を書くので下手、時間がかかる、分かりづらいなどの至らぬ点があると思いますが頑張っていくのでこれからよろしくお願いします。

この作品は原作崩壊、キャラ崩壊などが含まれているはずです申し訳ございません。

作者はアニメをGGOまで一周と、他の作者様の書いた二次創作小説の知識のみをもっているのでもしかしたら他作品と似てしまう部分があるかもしれませんし、間違えているところもあるかもしれません。

承知の上閲覧してください。

P i x i v にもいつか同じものを投稿します。

目次

始まり	1
いきなりご褒美	7
決心	11
ゲームスタート	18
揺れる心	27
入手	35
驚きの会遇	40
更なる出会い	50
よくある休日	60
攻略会議	70
ボス攻略・A New Hero.	A
New Legend.	88

大きな乖離	103
男だけの聖夜	117
黒の生誕祭	128
正義の十字架	141
圈内事件	169
罪の茨	185
事件の真実	197
事の終結	221
特訓と16連撃	240
2人きりの夕飯	256

始まり

俺の名前は齋藤雄介。

家の近くの高校に合格し、卒業式を迎えてから碌に春休みの宿題をせずにゲーセン通いをしている15歳だ。

なぜいきなりこんな自分語りを始めたかというと

「……なんかおかしくね？」

そう、何かがおかしいのである。

今、俺は目が覚めて顔を洗おうと自分の部屋を出たところで異変を感じた、昨日までとは決定的に違う何かを。

「桜が……咲いてない？」

昨日までは、微かに咲き始めてきた桜が窓から見えていたはずなのだ。

それなのに今、外を見れば桜の花は一輪もなく、他の木を見てみれば葉っぱに赤や黄色が入り混じっているのだ。

【紅葉】そんな言葉が頭の中に浮かび上がってきた。

それはおかしい、今は4月なのに、何故。

更には寝間着が昨日の寝る前とは変わっている。

何故、何故、何故、何故。

頭の中でその言葉が暴れ出したように頭痛がしてきた

「うわっ、雄介起きてたの？そんなとこに無言で突っ立ってないですよ、びつくりしちゃうじゃない。」

はっと顔を上げると母が居た。

何だか落ち着くことができた。

頭痛も治っている気がする。

「ご、ごめんお母さん。ちよつとボーつとしてたみたい。」

「あらそう？貧血とかじゃないなら良かったけど。」

「か、顔洗ってくるわ。」

「別に報告しなくてもいいのに、まあ洗ってらっしゃい。」

洗面台に行く途中でふとカレンダーが目に入った。

「2022年？10月？」

おかしい、おかしいおかしい、今は2019年4月だろう？

ひと眠りで3年6ヶ月が過ぎるか？有り得ないだろう。

そんなことを考えているといつの間にか鏡の前に立っていた。

「はっ？」

おかしな声が出た。

それもそうだろう、俺は黒髪黒目のはずだ、一度も髪を染めるなんて行為はしていないそれなのに

「白髪……瞳が紫……お、お母さーん!」

「なにようるさいわね、みんな起きちやうでしょ。」

「ご、ごめん……じゃなくてこれ!この髪の毛と目ん玉!どうなってんの!」

「何が?」

「何が、つて色だよ、い・ろ!」

「白と紫」

「見りや分かるよそれは!そうじゃなくてなんでこんな色してんのさ!」

「は?生まれつきでしょうが。」

「えっ……赤ちゃんの時から?」

「うん」

「ベイビーの時から?」

「Yes」

「ベベの時から?」

「しつこいわね、そうだって言ってるでしょ。とかいかいきなりそんなこと聞いてきておかしいわよ、どうしちやったの？」

「い、いや、少し寝ぼけてたみたいだわ……」

「あつそう、中学に遅刻だけはしないでよ。いつも家出る時間のもう10分前よ。」

「中学……えっ、まじ？」

「マジよマジ、本気と書いてマジと読むぐらい。いいからさっさと着替える！」

「は、はい……」

白髪紫目が生まれつき？そんなはずがない！俺は生まれてからずっと黒髪黒目だぞ？

しかも中学って……卒業したは？「何してんの！早く用意する！」

「はい！すいません！」

〈数分後〉

今俺は中学の前に居る、中学は俺が通ってたところと同じだった。

知らない人がたくさんいる……怖え！

クラスや出席番号って同じなのだろうか、というか自分は何年生なのだろうか……
何か分かるものは……… はっ！胸ポケットのこの重み、形、これはまさしく生徒手帳！

よ……
じゃなかったね、ミンティアだったわ。なんで俺中学にミンティア持ってきてんだ

「雄介おはよう、そんなところに立ってないで早く一緒にクラス行こうぜ。」

「お、おはよう。」

おっほ、知らない人！

って、待てよ、一緒にクラスに行く……同じクラスか！

「よし行こう、今すぐ行こう。」

「えっ、まあ行くけどいきなりどうしたんだよ？」

「あ、ああ、いや、何でもない。」

「そう？まあいいや。あ！チャイム鳴っちゃもう！急ぐぞ！」

「お、おう！」

〈放課後〉

結局俺は中学二年生だったみたいだ。

授業は分かるしつまらなかつた。なんで今日はずっとこの異変について考えていた。

今日起きる前までの世界を「前の世界」、起きてからの世界を「今の世界」と呼ぶことにした。

そのまんまだが名前が無いと分かりにくくなつちやうからな、仕方ない。

前の世界では2017・8年に中学二年生、そして黒髪黒目、そんなでもって寝る前は2019年の高校前。

それなのに今の世界では2022年で中学二年生、白髪紫目。

……
とりあえず家に帰ろう

いきなりご褒美

あれから無事家に帰ったが、学校で何事もなくて良かった。
というか、今日はいろんなことがありすぎて疲れた…

少し眠ろう

コンコン

「んあ、誰？」

「お母さんだけど、雄介？入って良い？」

「あ、どぞ。」

ガチャ

「入るわね、そういえばさテストの結果が珍しく良かったからご褒美あげるって言って結構時間過ぎちやっつたじゃない？」

「え？あ、うん、そうだね？」

「だからさ、今日、ご褒美あげようと思うの。」

「ああ、ありがとう。」

今は眠ることが一番のご褒美なんだけど…

「はいコレ、『ナーブギア』！」

「うん、ありがとう。は？『ナーブギア』!?」

「前から欲しいって言ってたじゃない？雄介誕生日も近いしテストのご褒美と合わせてプレゼント、『ソードアート・オンライン』だっけ？それも入ってるから。」

「あ、ありがとう……………」

ナーブギアってSAOってアニメの中のアイテムだよな？てかソードアート・オンラインってしっかり言ってたし…

どうなってんだ？なんで存在してるんだ？…

「あんまり嬉しくなかったかしら？」

「いや！そうじゃなくて嬉しすぎて言葉が出なかったというか！ね！」

「まあ、喜んでくれたのなら良かったわ。でも、ゲームのやり過ぎで勉強をおろそかにしない様にね、分かった？」

「わかったよ、本当にありがとう。」

「良いのよ、それじゃあね。」

ガチャ

「……………え、これどうしよ」

ナーブギアを貰ったはいいもののどうすればいいのかわからず、両手で優しく持った

ままたたふたしている。

「とりあえず置こう。」

コトン

「それにしてもSAOかあ…」

前の世界ではアニメは一回見たことあるがドはまりしたわけでもないので細部までは覚えていない。

アニメの世界に来たかもしれないし、もしかしたらアニメのキャラに会えるかもしれないのか、それでも…

「…死にたくはないなあ」

SAOとは世界初？のフルダイブ型VRMMORPG、だったはずだが、問題はそこじゃない。

ゲームの正式サービス開始後、ゲームマスターが現れゲームをクリアするまでログアウトができないと告げられる。

それがこのSAOというゲームなのだ。

もちろんこれはアニメの知識だが…合ってるよな？

見てから相当期間が空いてるからなあ…

前の世界でオタクに分類されるであろう生活を送っていたものとしてはSAOの世

界には入ってみたい、だが何も知らないこの世界の住人とは違って俺はS A Oがデスゲームになってしまふことが分かっている。

俺は死にたがりでも好奇心だけで動ける人間じゃない（はず）だ、そんな俺がS A Oの世界にすぐに入ることができるのだろうか。

否だ

ただの一般人がアニメの世界に入れるのか？

そもそもアニメの世界に俺なんかが入って良いのだろうか？

こんな後ろ向きな考えだけが浮かんでくる。

でも

「とりあえず…眠いな。」

今は何も考えずに寝よう、明日考えればいいさ。

そんな呑気なことを考えながら俺は眠りについた。

決心

「明るい… 朝か」

昨日は夜ご飯食べ損ねたまま寝てしまったようだ。

お腹が減りすぎてるな、なんか気持ち悪くなってきた。

棚の中身はなんじやろほい！

「シリアルだけかよ…」

なんか気分が爆下げだわ、シリアルは嫌いじゃないけど気持ち悪い程腹減ってるからなあ。

まあ食うか。

「いちそつさん」

誰に言うわけでもないけど呟いた。

食べ終わった後微かな希望を持ち鏡を見る

「白髪に紫目… 帰れてないのか…」

昨日の記憶は夢なんて都合のいい事はなくしつかりと現実であった。

このままこっちの世界で過ごすのだろうか？

元の世界には帰れないのだろうか？

「朝からブルーになっちまった、やめだやめ、スマホいじろ。」

「登校まで時間があるのを確認しスマホを探す。」

「おっ、あつたあつた。」

スマホを取り出しスマホのロックを解除する。

解除コードが前の世界と一緒になことに少しほっとしたのは内緒ね。

と、ここで気づく

「11月1日だと!?!」

昨日はカレンダーが10月を示していたから10月だとだけ理解していたがまさか

31日だったとは…

そんな事よりもソードアート・オンラインについて調べてみよう。

「は？正式サービス開始は6日の13時？5日後？まじかあ…」

まさかそんなすぐに正式サービス開始だとは思ってなかったため焦り、心臓が暴れ出し、額には汗が流れている。

「5日でSAOに入るか入らないかの決心をしろって言うのかよこの世界はよお…」

なんだかもう泣きそうである。

ふと時計を見るともうすぐ登校する時間だ。

「うおーもうこんな時間かよ、用意用意……」

〈学校〉

まあ、今日も何事もなく過ごすことができればいいな。

昨日で学年クラス番号は分かったから余裕だな。

でも昨日会話したのは朝話しかけてきてくれた名前も知らぬ男子のみ……俺ボツチか？（名推理）

いや、そんなことはないよな……

そんなバカみたいなこと考えたらもうクラスについていた。

昨日はずっとテンパってたから何もできずに一日が終わったけど今日は落ち着いて過ごそう。

そんでもってSAOについてよく考えよう。

キーン→コーン←カーン→コーン←キーン←コーン→カーン→コーン←

なんかTheチャイムって感じのチャイムだったな……

そんなこと言ってる場合じゃないな、この時間は……朝読書か。

昨日はこの時間、てか一日ずっとぶつぶつ言ってたからな、そりゃ昨日ボツチだわ。

今は読書だ読書、この世界の俺は何を読んでいるのかな……

…… 本がない。

あー、それは考えてなかったわ、まあいい、ソードアート・オンラインについて考えないと……

死にたくないそんなのは誰でもそうだが、俺はゲームに入る前にデスゲームと化すことを知っているが、早いか遅いかだけの問題だろう。

というか、なぜ今まで俺は死ぬということを考えていたのだろう、なにも攻略だけがすべてじゃない。

最前線で戦うから死ぬかもしれないんだある程度ゲームを楽しみつつアニメを見る感じで軽くプレイすればいいんだよ！そうだよ！

俺天才か？

完全フルダイブ型のVRMMORPGとかオタクがやりたいに決まってるじゃん。

あー、なんか気持ちがつつこい軽くなったわ。

昨日ちよつとシリアス感出してたのが恥ずかしいわ。

今日は楽しく学校を過ごせる気がする。

〈放課後〉

全然楽しく過ごせなかったわ、女子に

「昨日はぶつぶつ言ってたのに今日はニヤニヤしててきもっ

とか言われたんだが、やっぱり俺はボツチかよ…」

まあそんなことはどうでもいい!

早く家に帰ろう!

く家く

ヤバイ、頭から抜けてたことが一つあった。

S A Oには2年入ってるんだっつたよな? その間はずっと入院…

俺の家には金があるのか

という点だ、もしかしたらS A Oに囚われているということでも少しぐらい手当金が出るかもしれないがそれにしてもお金が無いとだめだろう。

親に金があるかなんて聞くのは気まずいけどこれは聞くしかない。

でも、なんて言っただけ聞いていい…? ?

考えろ… 考えろ… ハッ!

「お母さん?」

「雄介? どつたの?」

「ナーブギアもソードアート・オンラインも高かったでしょう? しかもソードアート・オンラインは発売日にくれたしお金の方は大丈夫だったの? お母さんはスーパーのパー

トさんでしょ?。」

「は?。」

「ん?。」

「会社勤めだけど?。」

「あ、ああ、そうだよね、うん。そんでお金の方は大丈夫だったの?。」

「余裕よ余裕、あんたが今まで全然我が儘言つてこなかったから有り余つてんのよ。」

「まじか。」

俺前の世界だとゲーセン行きまくつてて怒られまくつてたぐらいなのに?こっちの世界の俺は何もしてこなかったのか?

なんか悲しいなあ...

「まじよ、これでも私もお父さんもバリバリ稼いでるんだから。」

「へえ、了解、ただちよつと気になっただけだから。んじや部屋帰るわ」

こっちの世界だとお母さんは会社に勤めてるのか、前の世界との差異がこんなところに出てきてるのか...

何が同じで何が違うのかとか理解しないとだよなあ。

ともかく大丈夫っぽいな。これならSAOに入れそうだ。

く五日後く

今日は11月6日!

ソードアート・オンラインの正式サービス開始日じゃあ!

開始まではまだ時間はあるから設定をしていこう。

顔はどうせ自分の顔になるからなあ……不細工でいいか、その方が誰も寄り付かないし一人でアニメを、じゃなくてキリトたちを見ることができるしな。

やっぱ頭いいわ、俺。

二年間寝るにあたってちゃんとPCとスマホの中のエロ画像たちは処分しといたし、部屋の中の食品類は食い尽くした、これで完璧だろう。

そうこうしてるうちにもうすぐ13時だ。

ナーブギア被って……

「リンクスタート!」

「声でかい!」

ゲームスタート

なんか怒られた気がするんですけど…

まあいい、なににせよ無事にソードアート・オンラインの中に入ることができた。

「ちよつと散策すつかな。つとその前にメニューを…まあ、無いよね。」

俺が探してたのは言わずとも分かると思うがログアウトボタンだ。

無いとは分かっていたが自分の目で見てみると流石に怖くなってくるな…

でももう入つちまったんだ、腹くくるしか無いな。

んで、何をすればいいんだろうか？

散策するにしても町の外だとモンスターいるしなあ…

ん？モンスター？そうか、モンスターが居るんだから武器とか防具が必要か…

「片手剣…レイピア…短剣…他にも沢山…」

うわぁー、最初の町なのにこんな沢山武器あるの!?

どれにすればいいんやろ。

まあ適当でいいか、The RPGって感じの片手剣にするか。

ん？投げナイフ？忍者ムーブできるやん、買つとこ。

無事に武器買えたし町でもぶらつくかなあ。

ってそんな事してる場合じゃないか、いつ呼び出されるか分かんないからレベリングとソードスキル？の練習しとかないとな。

「うっそだろおい」

この俺、齋藤雄介は絶望していた。

「ソードスキルどうやって出すんすかこれ」

そう、全然ソードスキルが出ないのである。

カツコイイ技名叫んだりしてみたいのにい〜！

けどまあ、こんなことでへこたれてられないな。

雄介？ソードスキルが使えない？雄介、それはSAOと言えばソードスキルという固定概念に囚われているからだよ。

逆に考えるんだ、ソードスキルを使わなくてもいいさと考えるんだ。

ってことで気合で乗り切ろう。

ソードスキルが無くてダメメージは与えられるんだ、ソードスキルにこだわらず普通

に攻撃すればいいじゃないか。

いやあ、盲点だったわ。つてことで狩り再開だ！

くキリトsideく

俺は今クラインにソードスキルを教えている。

まあ、上達速度はあまりいいとは言えないんだが…

「くううう！全ツ然ソードスキルが使いねえ！」

「クライン、さつきから言ってるがしつかりとそのスキルのポーズを取ればあとはシステムが身体を動かしてくれるんだ、そう力を入れすぎるなって。」

「そうは言ってもよおく。」

「まあ時間はあるんだからそう焦るなって。つて、ん？」

「どうしたんだキリト？」

「いや、あのソロの男、動きが素人じゃないな〜と思って。」

「確かにスゲー勢いであの猪倒してんな。」

「いや、コイツの名前はフレンジーボアだつて… まあいいや、それにしても上手いな、

「そうだ、クライイン？」

「ん？どうしたんだキリト？」

「もしかしたら俺とは違う教え方でソードスキルを教えてくれるかもしれない、少し話を聞きに行かないか？」

「おっ、いいなそれ！行こうぜ！」

（雄介side）

もうソードスキルは完璧に諦めかけてます、どうも雄介です。

!? てかさ！フィールド見回しても一人にいる奴いないんだけど！ポツチ俺だけなんか

ネカマだったとしてもあのリア充爆発しろ！

あつ、嘘嘘、爆発したらホントに死んじやうからダメだわ。

にしても結構この猪倒したな…

つてぼーつとしてる場合じゃねえ！もつと倒してレベル上げねえと

「なあ！そのあんた！」

俺か？いやでも知り合い居ないしなあ…

「おーい！聞こえてねえのか？」

「クライン、もう少し礼儀をもつてだな…」

クライン：… えっ!?!クライン居るの!?!どこだ!?!

「おつ、やあつと反応してくれたな！」

「クラインがいきなりすまないな。」

「え？いやいや！全然大丈夫ですよ！」

話しかけてきてたのクラインとキリトだったの!?!

てか俺に話しかけてたの!?!

やっべー、どうしよ…

「つてことなんだけど手伝ってくれるか？」

「んなあ？ご、ごめん聞いてなかったも一回言ってくれるか？」

「ええと、俺と一緒にクラインにソードスキルを教えてあげられないかなって思ってた、遠くから見てたけど初心者の動きじゃなかったからさ、どうかな？」

俺の動きが初心者じゃない？

ええ、バリバリの初心者なんです。

てか俺ソードスキル使えないんだが…

「クライン、詮索はタブーだぞ。」

「いや、気にしてないから大丈夫だ、だが地名ってわけじゃないな。」

「そっか、聞いちまって悪かったな、あ！そろそろソードスキル教わろうぜ！サイタマ！」

「そうだな、キリト、お願いできるか？」

「ああ、構わないさ、さあ始めようか。」

「うおっしやああああ！キリト！ソードスキル使って猪倒したぞ！俺天才じゃねえ!！」

「初勝利おめでとう、でもそいつ、RPGによくいるスライムレベルの敵だからな？」

「え？まじ？おりやてつきり中ボスクらいかと…。」

「まさか」

「というかサイタマ！おめえめっちゃつええじゃねえか！しかもすぐにソードスキル覚えるしよお」

「いやあ、キリトのおかげだよ、クラインが先生と呼ぶだけはある、さすがだよ。」

「本当だ：． サイタマはあるか？」

「い、いや、俺も無いな。」

「こりやあ運営大変だろうなあ〜。」

「今頃運営はブーイングの嵐だろうな。」

「それよりクライインピザは逃すだろうな、ドンマイ。」

「ああ！俺のピザがあ：．．」

「そろそろ運営からのアナウンスとかが入ってもおかしくないと思うんだが：．．」

リーンゴーン リーンゴーン

そんな鐘の音とともに俺の視界は真っ暗になった。

ここから始まるんだ、SAOが！

揺れる心

視界に光が戻った俺が見たのは広場に集まる大量の人だった。

「キツ、キリト!?これどうなってんだ!」

「お、俺にもわからない!」

周りのほぼ全ての人たちは驚きでざわついていた。

と、そのときだった、真っ赤なフードを被った巨人が現れたのだった。

この時がキタ、俺は心の中でそう叫んだ。

『ようこそ、プレイヤーの諸君、私の世界へ。』

『私は【茅場昌彦】、このゲームのゲームマスターだ。』

『君たちはログアウトボタンが無くなったことに気付いているだろう。』

『だがそれはバグなどではない、仕様だ。もう一度言う、それはこのゲーム本来の仕様だ。』

周囲のざわつきがさらに大きくなる。

『この世界では、死んだら二度と復活できない。そして、死んだら現実でナーヴギアが脳に高出力マイクロウェーブを流し脳を破壊し、生命活動を停止させる。』

『さらに外部の人間によるナーブギアの停止、解除が試みられた場合も同じく高出力マイクロウエーブが流れることになる。』

周りからは「ふざけんな！」や「演出だよな？」や「どういうこと?!」といった言葉が聞こえる。

「あ、あいつ頭おかしいんじゃないのか？なあ、キリト？」

「マイクロウエーブの原理は電子レンジと同じだ、リミッターを外せば脳を焼き、壊すことも不可能じゃない……」

「じ、じゃあよ、電源さえ切れば……」

「ナーブギアには内臓バッテリーがあるんだよ……」

「サ、サイタマ……」

『残念ながらすでに家族や友人などが警告を無視し、ナーブギアの強制解除を試みた例がある。その結果、213人がアイングラッド及び現実世界からも永久退場している。』

「永久退場……死か……それに213人も……」

「信じねえ、信じねえぞ俺は！」

『ご覧の通り、多数の死者が出た事を含め、この状況をあらゆるメディアが報道してい

る。よってすでに強制的にナーブギアを解除される危険は低くなつてると言っている。諸君らは安心してゲーム攻略に励んで欲しい。』

『そしてこの世界では蘇生手段は今までもこれからも機能しない。現在の地点はイングラッド1層、つまり最下層だ。そしてここから各フロアの迷宮区を攻略し、さらにフロアボスを倒すことで次の層に進むことができる。そしてここから各フロアを攻略していき100層の最終ボスを倒せばゲームクリアだ。』

「クリアなんて……」「ひゃ、100層……」といった絶望色に染まった声がちらほらと聞こえてくる。

「ク、クリア……100層……ふざけんな！βテストだと碌に上がれなかったって聞いたぞー！」

「落ち着けクライン！」

「落ち着けなんて無理だろ！」

「そうは言っても……」

『それでは最後に、諸君には一つのプレゼントを贈つてある、アイテムストレージを確認してくれたまえ。』

「これは……手鏡？」

キリトだけではなく、ここにいる全員が手鏡を取り出した。すると青白い光がプレイヤーたちを包み込んだ。

「うわっ！」

「大丈夫かキリト!? サイトマ?!?… ん? キリト? サイトマ?」

「ああ大丈夫… って誰だ?」

「クライン、キリト、俺は大丈夫だがお前らは… クラインか?」

そこにはキリトの装備をした少し幼く見える少年や、クラインの装備を着た少し年を重ねた顔の違う男、サイトマの装備を着た元よりもすこしいケメンな少年が立っていた。

周りでは「お前男だったのかよ!」「おっさんじゃねえか!」「汚エー! 不っ細工!」といった声が聞こえてきた。

雄介は内心「あ、あのカップルやっぱネカマだった」と場違いな感想を考えていた。

「おめえらがキリトとサイトマなんだよな?」

「あ、ああ、それでクライン… だよな?」

「おう! その通りだ! でもなんで現実の姿になつてんだ?」

「ナーブギアは顔をすっぽり覆っているから顔は読み取れることができたんだろう、で

も身長や体形は……」

「キヤリなんちゃらで自分の身体を触って触りまくっただろ、おそろくあれだろ。」

「おめえら二人ともよく分かんない……」

そんな話を話しているとどこかの誰かが「キヤアアアアア！」と叫んだ。

それをきっかけに辺りはパニックに陥ってしまった。

「ふざけんなよ!」「殺す気か!」「嘘だろ……こんなの……」「出してくれー!」そんな声
が聞こえてくる。

この騒ぎがおさまるような気配は感じられない。

雄介は心の中で自分の考えを改めていた。

ソードアート・オンラインを始める前まではこうなることを知っていたはずなのに軽
くアニメを見るぐらいの感覚で参加しようなんて思っていた。

いや、思ってしまった。

だが現実はどうか、自分以外はこの世界を生きる住人であり、純粹にゲームをしよう
と思っている人間しかいなかった。

だがソードアート・オンラインがデスゲームと化した今、周りの人たちはどうだ?

心の底から恐怖し、絶望し、怯え、泣き叫び、助けを乞っている。

こんな中で俺はアニメを見ようと楽しんでいるのか? そう思うと酷く自分がアホら

しく恥ずかしくなってきた。

俺は…俺はどうすれば…

「クライン、サイタマ、ちよつと来てくれ。」

キリトは二人を路地裏に連れ込んだ。

「ど、どうしたんだよ？キリト？」

俺はどうすれば…

「俺はこれからすぐに次の町に行こうと思う、茅場の言葉が事実だとしたら俺らは自分を強化していかなくちゃならない。危険な道のリになるかもしれないが先に進むにはこれが一番得策なんだ。ここの狩場はすぐに次の町に移動すれば人も少ない、俺のβ版の知らない状態になると思う。その点すぐに次の町に移動すれば人も少ない、俺のβ版の知識を使えば多少は有利に進むことができる、どうだ二人とも。」

「すまねえ、俺はリアルルの友人たちと一緒にプレイしようって言ってたんだ俺あいつらを見捨ててはおけねえ、だから俺は行くことはできねえ、すまねえ…。」

「（これ以上人数は流石に増やせないからな…どうすれば…）」

「キリト…これでも俺は別ゲーで頭だったんだ！心配すんな！それにおめえから教わったテクで何かあつても切り抜けてやるよ！」

俺はどうすれば…

「そうか……ならここで別行動だ、何かあったらメッセージを送ってくれ。」

「おう！」

俺はどうすれば……

「それでサイタマはどうするんだ？」

俺は……俺は……

「行く……行かせてくれ。」

こつちの世界の住人じゃない、自分だけがこの先を知っている、原作にはかかわらない方が良く、死にたくない、何かが変わってしまったらどうする……だが……だがそれがどうした!!

俺は知ってることがある！その知識でできることがあるんじゃないのか!? 一人でも命を助けることができるんじゃないのか!? 誰かの流すはずの涙を止めることができるんじゃないのか!?
だから俺は………

戦う!

「決まりだな、俺とサイタマは次の町へ、クラインはこの町にとどまる、これでいいか？」

「おう！（ああ！）」

「それじゃあ行こうサイタマ。一旦さよならだクライン、元気だな！」

「おい！キリト！おめえ案外可愛らしい顔してんじゃねえか！結構好みだぜ！サイタマ！おめえはアバター微妙なくせしてリアルはイケメンじゃねえかよ！」

「お前はその野武士面の方が10倍似合ってるよ！」

「クラインだつてカツコイイおじさんつて感じじゃねえか！」

「それじゃあ」

「「またな！」」

今日ここで本当の意味でSAOは始まった、そして俺の中の【物語】も動き出した。

この動き出した足も物語も甘えのなくなった心も止めはしないそう決意した。

どんな敵にも負けはしない！

「うおおおおお！」

そんな事を考えながら次の町へと向かっていった。

入手

次の町、ホルンカの村についた俺たちはこれからどうするかを話し合っていた。

「キリト、俺はこの世界についてよくわからない（大嘘）、これからどうすればいい？」

「まずはクエストでアーニルブレードを手に入れよう。」

「アーニルブレード？」

「ああ、この時点でいちばん強いはずの剣だ、クエストのクリアはすごく難しいものとなるがやるか？」

「当たり前だ、強くならなくちゃいけないからな。」

「そう言うと思ったよ、それでクエストの詳細なんだが…」

「リトルペネント」というモンスターのドロップアイテムである「リトルペネントの胚珠」というアイテムが必要らしい。

だがそのアイテムはドロップ率がとても低く、その上そのアイテムを落とす花付きのリトルペネントは全然出現しないらしい。

つまりだ

「どんだけ時間かかんだよこれ…」

「しようがないだろ、レアモンスターのレアドロップなんだから。」

「それにしてもこれは精神力がゴリゴリ削れるなあ……」

「ははは……はあ、俺もだよ……」

「つと実付きのが来たぞ！」

実付きとは、花付きと同じ確率で出てくるモンスターであり、ついでに実を攻撃してしまうと仲間を呼び寄せるといふ厄介な能力を持っている。

「ふっ！はっ！」

「せい！おらあ！」

キン！キン！ザスッ！

「ぐっ！すまないキリト！実を攻撃しちまった！」

「しようがない全部倒すぞ！死ぬなよ！」

「おう！当たり前だ！」

「はあ……はあ……」

「うおおおおおらあああああ！」

グサッ！………パリンッ！

「ふう……なんとかすべて倒せたな……」

「やっぱ流石だな、キリトは、ソードスキルのタイミングが完璧だったよ。」

「いやいや、サイタマの方こそ立ち回りが上手かったよ。」

「いやいやそつちこそ…」

「いやいやそつちの方が…」

「………」

「恥ずつ！あと気まずつ！

「なんか会話をしないと… あつ！

「なああ！」

「あ……」

「キリトからどうぞ。」

「お、おう。ええと、リトルペネントの胚珠を手に入れてた、あの呼び寄せられてたやつらの中に花付きがいたらしいな。」

「あ、俺も手に入れてたことを言おうと思ってたんだが…」

「ふふっ」

「はははははー！」

「よしっ！キリト！アーニルブレード貰って宿に帰ろうぜ！」

「おう！」

「これがアーニルブレードかあ… かつこいいな…」

「俺も最初に手にしたときは全く同じこと考えてたよ。」

「まあ、男ならそうなるよなあ〜」

「そうだなー、つと宿についたな、今日は結構な狩りをしたから明日は一日休もう。」

「賛成だ、明後日からはまた狩りの再開だな？」

「そういうことだ、しつかり休んでおくんだぞ？」

「了解だ、そんじやお休み。」

「ああ、お休み」

宿に帰ってきたが、今日はアホみたいに疲れたな…

頭も身体も酷使し過ぎたせいでクツタクタだ。

ボフツ

ベツトに飛び込んでみたがホントに現実みたいだ……

アーニルブレード……俺の、いや、俺とキリトの頑張りの結晶だな。

なんか見てて楽しくなってきたな。興奮で眠気が吹っ飛んだ気がする。

……いや、全然眠いわ。

とりあえず眠ろう……

驚きの会遇

「ふわあ〜」

良く寝たわー。

もう朝か……ずっと寝てたいな……

まあ、現実ではずっと寝てるんですけどね！

いや、笑えねえな、やめよ。

とりあえず外に出るか。

流石茅場昌彦って感じだな、現実と変わんねえ、てかこっちの方が綺麗なんじゃないか？

現実ビルと家と店とが並んでてそうそう綺麗な緑なんて見えないし。工場や車の排気ガスとかで空気が汚かったり、夜まで明るいせいで星は見えないし。

あつ、でも大人の方たちが残業してくれてるおかげで綺麗な町明かりは見えるけどね！

俺は言いたいんだ！彼女が出来て、夜に高台から町を見下ろしながら

「あの光の一つ一つが社畜によるものなんだね……」

ってね！

……俺めっちゃ失礼だな。

あつ、ソロプレイヤーがフィールドに出てくみたいだな。フツ……俺はもうボツチじゃないんだ、なんか優越感。

少し歩いたけど普通に村って感じだなあ、超長閑。

起きたばっかだけど眠くなってきた。

ダァン！

!?

何の音だ!?

フィールドの方からだな、なんかあったのかもしれない、急いで向かおう。

多分ここら辺から聞こえたはずなんだが…：あそこか!?
って人が倒れてる!?

しかもリトルペネントが攻撃しようとしてやがる!

買っておいいた投げナイフ使うか。

「おらっ!」

買った分全部分投げちまったよ…

でも倒せたならオツケーです!

なんてふざけてる場合じゃないな。

「大丈夫か!」

返事が無い…：気を失ってるのか!?

というかこのゲームで気を失うってあるのか?

恐怖心とかでなったりするのkブオン!

「あつぶね!」

なんでいきなりこんな大量になってんだよ!

実付きの実を一回突つついたってレベルの数じゃねえな、これ。

とりあえずこの人を守りながら倒していくしかないか。

グサツ！ズバツ！ザシユ！

「くっそ、全然減らねえ！」

最初に居た数が多すぎるせいで倒してるのに数の減りが感じられない！

流石に一人で人を守りながらこの数を相手するのはキツイか!?

いつそ抱えて逃げる賭けに出てみるか…？

ん？あそこに誰がいる!?

「おい！あんた！こいつらを相手すんのを手伝ってくれないか!？」

「ああ、かまわえねぜ。」

「ありがとう！マジでたすかる！俺はこいつらを倒すことに専念するからあんたは倒れてる人を守りながら倒していつてくれ！」

これでだいぶ楽になるだろう。

「了解だ、イツツ・シヨウ・タイムー」

イツツ・シヨウ・タイム？

何だっけ…聞いたことあるような気がするんだが…

「ぐっ！良いの喰らっちゃった！」

変なこと考えてる場合じゃないな、戦いに集中しねえと。

一人増えたつてのは本当にでかい！

もう後数体だけだ！

「おらあ！つと、こっちは片付いた！あんたの方はどうだ!?」

「後2体だけで終わりだぜ。」

「そうか、今援護に…!?おい！倒れてる人の方にリトルペネントが向かってる！どうにか対処してくれ！」

「任せときな、ふっ！どうだ？COOLに決められたらろ？」

「あ、ああ。」

強い！対峙しているリトルペネントの攻撃をもう一体のリトルペネントに当て、更に追撃することで両方倒したのか!?

助っ人がこの人でマジで助かったな…:

「なあ、あんたらの危機助けたんだ、報酬があつてもいいだろう？」

「それは勿論だ、ドロップアイテムとコルは渡す予定だったがなんか他にも要望あるか

？」

「アイテムとコルはいらねえ、その代わり一つだけ頂くぜ。」

「何をだ？」

「こいつだよ。」

グサツ！

「なっ!？」

こいつ気絶してる人に剣を刺しやがった!?!なんで!?

じゃなくて早く助けねえと!

パリンツ!

クソっ!間に合わなかった!

「てめえ!なんで!？」

「H A H A!お前のことはこのゲームが始まってすぐから目をつけてたんだよ。」

「どういうことだ!？」

「茅場からこのゲームがデスゲームになったと告げられたとき辺りはパニックになっている人間ばかりだった。俺でさえ少し動揺したんだ、だがお前はどうか?お前はあの中で一人だけにやけ顔を我慢してたぜ。」

「!？」

まさか笑いかけてたなんて…。しかも見られてた!?

理由がアニメの世界に来たっていう理由だったとしても俺はあの場で笑いかけたのか!?

「気づいてなかったのか? ヒュウ! それはまた傑作だ! そんなお前を見かけた俺は嬉しくなっちゃまってな、ついちよつかいかけちゃまったんだよ。それでもってこのプレイヤーを気絶させたのもリトルペネントを呼び寄せまくったのも俺ってわけだ、楽しかったぜ。」

そう言う男はぐるりと反対を向き歩いて行った。

追いかけてようとして走り出したが振り返ってきたので立ち止まってしまった。

「っ!? なんだよ?」

「いや、自己紹介がまだだと思ってな、俺の名はプー(P O H)だ、これからよろしくな。」

プーだと!?

だからあいつの喋り方が聞いたことあるように感じたのか…

って早く追いかけてええと!

「いねえ…。クソッ!」

俺は宿のベットで今日のことを思い出していた。

「人が……死んだ……それも目の前で……」

アニメで得た知識を使って一人でも助けようと思ってたのにすぐ後に目の前で人が殺されてしまうなんて……クソっ！

もっと早く動けてれば…… もっと俺が強ければ…… あの時プーだと気づけていれば……

「クソッ！情けない！」

俺は絶対に強くなってやる！

《優しさ……条件を達成》

《正義……条件を達成》

《覚悟……条件を一部達成》

《……を一部アンロックします》

更なる出会い

「万丈目サンダー!?!?……… 夢か。」

プーと遭遇してからおよそ1ヶ月が経った。

そして俺とキリトはツールバーナへと来ていた。

「キリトさんや。」

「なんだねサイタマさん。」

「ここツールバーナで第1層ボス攻略会議が近ごろ開かれるらしいですよ。」

「えっ?!?それ本当か!?!?」

「えっ、あ、うん、ほんとだけどさ、いきなり素に戻らないですよ、ビビるしなんか俺が恥ずかしいじゃん。」

「あつ、悪い。それにしてもやつとか……」

「ここまで長かったような短かったような、そんな1ヶ月だったな。」

「ああ、レベリングに迷宮区攻略……こんな濃い1ヶ月は初めてだったかもしれない。」
「俺もだよ。」

このデスゲームが始まって1ヶ月、ここまで約2000人の人間がゲームオーバー、

死を迎えてしまった。

その中には確かデスゲームへの絶望から自殺してしまった人もいたはずだ。

アニメやラノベ、ニュースや新聞で見たらそんなもんかと思わないような状況、だが実際に身を置いてみてわかる、大量の死が身近に感じられることで焦り、恐怖、そういつたものが押し寄せてくる。

だが俺はもうクリアを目指し後に攻略組と呼ばれる集団に身を置こうとしている、だから恐怖には負けてられない…。

「それにしてもこのボス攻略がどうなるかでこれからが決まると言っても過言じゃないからな、気を引き締めて準備は怠らない様にしよう。」

「そうだな、じゃあサイタマ。」

「ん？」

「レベル上げ行こうぜ！」

「おっふ、まじかよ…。」

鬼畜かな？

「レベルいつこあがりましたよ、キリトさあん：。」

「それじゃあそろそろ宿戻るか？」

「そうだな、そうしよう、それがいい。」

「随分食い気味だなあ：。おっ、サイタマ、あのフード被ってるプレイヤー見てみろよ。」

「あのレイピアの人？」

「ああ、あの《リニア》のスピードは俺でも出せないな。」

「だっってお前スピード重視じゃないだろ？」

「そうだけどそういうことじゃなくてさ。」

「んー？」

「おっ、モンスターを倒すみたいだな、ってあれは良くないな。」

「オーバークイルだ、それも結構なオーバー。」

「結構なオーバーってなんだよ…。」

「なあキリト。」

「どうしたんだ？」

「いや、あのレイピアさんめっちゃふらついてるけど大丈夫かな？」

「疲労じゃないか？あんなにソードスキル連発してたんだし。」

「そんなもんかー、おい！ぶっ倒れたぞあのレイピアさん！」

「モンスターが寄ってきてる！行くぞサイタマ！」

「おう！」

「おい！あんた大丈夫か!？」

「サイタマ、無理に起こさずまずは安全な場所に連れて行こう。」

「ああ」

「んん：」

「レイピアさんが起きたみたいだぜ、キリト。」

「それは良かった、なあ君、大丈夫か？」

「ええ、平気だけど：：。ってなんで私おんぶされてるの!？」

「お前：：。じゃなくて、あんたが倒れたから安全地帯まで連れてってやろうと思ったんだが：：。担いだ方がよかったか？」

「そういう事じゃない！降ろして！」

「いやでも「早く降ろして！」アッハイ。」

降りたその時、偶然にもフードが取れた。

そこには長い栗色の髪の毛を生やした女の子が立っていた。

「君は女性プレイヤーだったのか。」

「そうだけど何？」

「い、いや、何でもないんだ。ただ珍しいなと思って…。」

レイピアさんは女の人だったのか。

ん？女性で髪の毛が栗色でレイピア使っててキリトと出会う…

アスナか！

でもどんな会話してたっけ…？

「それで？なんでここまで運んできたの？」

威圧感。パないの！

うわ、こつち睨んできた。声に出してないんですけど…

「ええっと…。」

「おいキリトきよどんなって。ここは俺が代わりに説明するから。」

俺は小声でそう言った

「すまん、助かる。」

「で？なんで運んできたの？」

「それは俺から話させてもらう。まず一つ目だが、あんたモンスターに対してオーバーキルし過ぎだ。」

「オーバーキルって？」

初心者かあ…

「オーバーキルってのは相手の残りHPに対して必要以上にダメージを与えてることだよ。」

「ダメージを与えすぎて何が悪いのよ。」

「あんたはトドメを刺す時ソードスキルを使ってただろ？ソードスキルは技を出した後硬直があるから一体倒したとしても他の敵に攻撃される可能性が高くなる。そんなもって集中力を消費するし疲労も出てくる。あんたはソロだろ？帰り道も考えるなら連発は控えとけ。」

「帰り道って、どこに帰るのよ。」

「いや、普通に町とか村だろ。こつからまあまあ時間かかるからな、帰るときに集中力を切らしたりだとか疲労が溜まってるとっていうのは相当危険だろ？」

「それなら心配いらないわ、私ここで寝てるから。」

「いやいやいや、それマジか!？」

えっ!? そうだっけ!?

アスナってこんなところで寝てたっけ!?

「君、そ、それは良くないだろう。」

「そうだキリト、言ってみてやれ！」

「何だよ?」

「ほ、ほら、アイテムとか武器は…」

「攻撃を喰らわなければ回復なんて要らないし、武器は同じものをため込んで、睡眠からさつきも言った通りモンスターの入ってこないここで取ってる。」

「どれだけそんな生活を送っているんだ?」

「さあ? 4、5日ぐらいじゃない?」

「なっ! そんな事してたら死んでしまうぞ!」

「どうせ… どうせみんな死ぬのよ。」

その言葉に俺がキリトが息を呑んだ、いや、もしかしたら二人共かもしれない。

もしかしてここだけ重力の働きが強いのだろうか、そう感じるほどに空気が重い

「そんな事言うなって…」

「あなたたちも心の中でそう思ってるんじゃないの? こんなクリアできない、帰れないんだって。」

「そんなことは…」

「あるのよ、それにもう1ヶ月経つのに第1層はいまだに突破されてないのに死者は増えるばかり、どうせ無理なのよ。ここで死ぬか少し先で死ぬかって違いだけでしょ？」
こいつ、心から絶望してる…：てかなんかこんなに関張ってるのに無駄だって言われるのは癪だな。

どうにかストレスぶつけながらも生き延びようと思える事言わねえと。

「違え…： 違えよ、少なくとも俺とキリトはクリアを目指している。いや、クリアする！それになあ、俺ら以外にも生きるために、帰るためにこのゲーム世界に抗って歯向かって立ち向かって足掻いてる奴だつて居るんだよ！それなのにおめえは勝手に自己完結して諦めてんじゃねえ！」

「あなたに私の何が分かるの!?!そんな口先の人間なんて腐るほどいるわ!」

「口先だけじゃねえつてこと見せてやるからせいぜい俺が死ぬまで生きてるんだな！行こうぜキリト。」

計画通り。つとあぶねー、笑うとこだった。

まあ、これでアスナがここで野垂れ死ぬ事は無いだろ。

「あ、ああ。なあ君。」

「なによ。」

「数日後にツールバーナつて町で第1層ボス攻略会議つていうのが開かれるんだ、俺ら

も行くから来てみたらどうかかな？それじゃあ。」

「おーいきりト！遅えぞ！」

「ごめんごめん、今行く！」

これはボス戦で活躍しないといけなくなつたな、そのためには…

取り敢えず寝よう!!

よくある休日

グーグーグーグーパスパスパス

「おはよーー!!!」

ハッ！俺は葉っぱ一枚だけでダンスを！

………夢か。

俺はレイピアさん：．アスナと別れた後、キリトとずっとレベル上げを行い、ボス戦に備えていた。

だが今日の午後4時30分には記念すべき第1層ボス攻略会議があるためそれまでは各自休みということにした。

あれ？俺らアスナに対して自己紹介したっけ？まあ、したかしてないか微妙だから今度会ったときは名前は呼ばないでおくか。

「暇だし武器とか見に行くか。」

そう言えば武器、防具を新調していないことに気づき、良いものが無いか探しに行こうと思いついた俺は、町をぶらりすることにした。

「あつ、これデザイン良さげじゃん。色違いも結構あるな、何種類か買おう。しかも隠蔽上がんのかあ。」

俺が見つけたのは黒地や白地、赤地などに地色以外の色のラインの入った袖なしパーカーだった。

結構派手な気がするんだが本当に隠密上がんのか？安直だけどフードついてるからとか？

……… まあ、効果って気にしたら負けなところあるしそういうもんだと思っておう。

というかこれは防具なのか？服なのか？布だから刃物とか突き抜けてきそうなんだけど。

なんか頭おかしくなってきた。もう何も考えず購入しよう。
どんな服と合わせて着ようかちよつとワクワクしてくるな。

「装備品でいい感じなのは……… これかな？」

ピアスなのかイヤリングなのかわからんが耳に付けるやつ。

この世界でピアス付けるってなったら穴開ける必要あるのかな？開けなくていいな

らピアスとイヤリングの違い無くなるよなあ。

うーむ、前の世界ではこんな凄いゲーム無かったからどうでもいい事に過剰に反応しちまうな。

コルなら全然使わなかったせいで余りに余ってるから気になった物は片っ端から買っついでいこ。

「こんなもんでいいかな。あとは武器だな。」

今までは投げナイフとアーニルブレードしか使っつてこなかったからな、いろんな武器を使っつてみないとオタク中二病患者の名が廃るつてもんだからな。

なんか今含みなかった？気のせい？気のせいと思っつておこう。

「両手剣とかいいな。主人公感でるなあ〜」

見た目重視で主人公ロールでもしてみようかな？

「まっ、両手剣と槍でも買っつとくか。あ、投げナイフも忘れないように買い足しとかないと。」

俺は早速、さつき買ったパーカーとアクセサリーをつけてフィールドに出ようとしていた。

「なあそこの君ちよつと待ってくれないカ!」

服なのか装備なのか、布は切られてしまうのか気になることがいっぱいだからな、楽しみだ。

「オーイー!聞こえてないのカ!?!」

見た目重視で買った剣で主人公ごっこしよ。

ソロってこういう時いいよね。

「…………… エイツ!」

「ヌツ!」

誰かに俺のパーカーのフードが引つ張られた!

くっそ、この服おニューだぞ!

「てめえ何してくれてんだよ!」

「ニヤ！そんなに怒られるとハ… 悪かったナ。」

「いや、謝ってくれたからいいけど… 俺も少し言い過ぎたよ。」

そもそもこの世界^{ゲームの中}じゃ服伸びねえか。

「それじゃあ二人とも悪かったってことで仲直りしないか？オレっちの名前はアルゴ（Aigo）だ。よろしくナ。」

「ああよろしく、俺はサイタマだ。と言うか二人とも悪かったって俺のセリフじゃ…？」

「細かいことは気にすんナ。」

アルゴアルゴうむ… アニメで見たはずなんだが…

「!!、あ、うん。それでなんで俺の事呼び止めたんすかね？」

このフェイスペイントはあれだわ、鼠のアルゴ、情報屋だわ。

「この前フィールドで女性プレイヤーと言ひ合ひしてただ口？それを見かけたから話を聞こうと思つてナ。」

馬鹿正直に言うのはまずいよな…

「いやなに、ちよつとしたプレイヤー同士の只のいざこざだよ。ゲームをやつてる以上あるあるだろう？」

「オイラにはそうは見えなかつたけどナ」

「まあ、他人には分かりにくい怒りとかあるんじゃないか。」

「まあそういう事にしておくヨ。」

「そいつはどうも。」

なんとか乗り切ったか？

この人どんな情報でも売りもんにするらしいからな、気を抜いてらんねえ。

「聞かれたくないような事聞いて悪かったナ。オネーサンは情報屋っていうのをやるから情報が欲しい時はオネーサンに聞いてくれヨ。サイ坊はこれ持つてる力？」

「なにそれ？持つてないわ。てかサイ坊やめろや、機械で出来てそんな名前になっちゃったじゃねえか。」

「ニヤハハハ！サイ坊は面白い事言うナ。というかまさか持つてないとハ……」

「で？それが何？」

「そうだったそうだった。はいこれお近づきの印にプレゼントだよ。」

「おう、了解了解。有難く受け取っておくよ。」

そのままポケットにドーンだYO！

「なんか雑だナ…… そうだ、フレンド登録しておいてもいい力？」

「かまわえねぜ。ほい、これからよろしくな。」

「こちらこそよろしくナ、それじゃあオレたちは失礼するヨ。」

「はいはい、良い付き合いが出来ることを期待してるよ。じゃあな。」

この出会いがよい結果に繋がればいいけど…

ってやべえ！フィールド行こうとしてたのに時間食っちゃった！

武器とか試さないといけないのに！とりあえず走るか。

さあ私サイタマこと齋藤雄介はフィールドへとやってまいりました、果たして今日のこの戦いで新たな武器の勘はつかめるのでしょうか!?

開始のホイッスルが会場に響きます、今キックオフです!!

「あ、あっちの方にモンスターいるな。」

久々に実況ごっこやったけど相変わらず楽しいわ。

多分皆小さい時、なんかのスポーツをテレビで見た時は心の中でも実況してただろ。してたはずだ。してたよね？

なんか心配になってきた。

とつとと狩り始めて武器の練習しよ。

「槍はどこかな、槍はどこかな」

ストレージの中が多いせいで探すの一苦労だな、買い過ぎるっていうのも考え物か…

「おろろろろ?」

吐いてないですよ。

それにしてもメニューの端っこに今まで見たことない欄があるんだけど…

【特殊能力】 う?!

キリトが後々手に入れる二刀流的なあれか？

まだ1層だよ？早くない？

まあいいや、ちよつと見てみよ。

「Oh読めな〜い。」

MO☆ZI☆BA☆KE してるじゃないですかやだー。

うーむ、これじゃあどうしようもないな…

特殊能力つてのはほつという新武器だ新武器！

「こんなもんかな。」

俺は約3時間ほど狩りをしていた。

槍や両手剣を一通り試し、多少慣れてきたところで武器二つ持ちつても試してみた。

リーチの違いとかで戸惑いはしたが結構慣れて使えるようにはなったと思う。

ソードスキルは使えないけど、逆にソードスキルに頼りまくってる人相手には意表を突けるかもしれないな。

「ん？3時間ぐらい狩りしたんだよな。今は……… 4時20分………」

「人人人人」

∨ 4時20分 へ

? Y ^ Y ^ Y ^ Y ^ Y ^ ?

攻略会議が4時30分だろ!?!やべえ遅れる!

そうして俺は体育で取った記録よりも遥かに早いスピードを出し会議の会場へと向かっていくのだった。

「いやそーいえば俺会場知らねえ!!!!」

会場へ向かっていくのだった?

攻略会議

「こ、こ、こか…」

あれから俺は20分ほど走り続けついにボス攻略会議の会場へとたどり着くことができた。

「いやあ、遅刻だよなあ…。しかも初会議で10分はまずいよなあ。」

初会議じゃなくてもまずいです。

「入りたく無えなく、入るしかないよな」

隠蔽MAXでいざ出陣！

そーつと、そーつと…。あ、キリト居るじゃん。あそこ行こ。

「キリト、おーいキリト。」

なるべく小声でそう話しかける。

「え、なんですか、ってサイタマ!?!」

周りの人の視線が一気に集まる。

「すいません、ちよつと躓いちやって！おいキリトうるせえよ。」

「あつ、ごめん。でも今までどこにいたんだ？」

「あー、ちよつと道に迷つててな…そんな感じ？」

「あの青い髪の司会してる男、ディアベルが自己紹介をしてグループを組んだところだところだ。」

「え、ちよま、俺今来たからグループとかないんですけど。ボツチなんですけど。」

「ちゃんと俺と同じってことにあるから安心しろよ。」

「マジか、マジでありがとう。キリトさん素敵！イケメン！抱いて！」

「ちよ、止めてくれよ…あとアスナも同じグループだから。」

「えっ!?アスナ!?（あ、俺まだ知らないじゃん）って誰？」

「この前お前が言い合いしてた女性プレイヤーだよ。」

「なるほど、よろしく…え？なんで？」

「あんな偉そうなこと言ったあなたがどれほどのものか近くで見極めようと思ったのよ、悪い？」

「あ、いえ滅相もございませう。キリトオオオオお前マジでやってくれたな！」

「俺もアスナも一人だったんだから仕方ないだろ！ていうかそんな小声で言っても隣だから聞こえるぞ。」

恐る恐る隣を見てみると小刻みに揺れるフード…これはガチギレですわ。

「はあ、もういいや。諦めよ」

「諦めるって何よ、私がいちや悪いの？」

「そういう事じゃないんですけど何とというか、ねえ？」

「俺に聞かないでくれよ……」

そんな事を話していると向こうの方から声が聞こえてきた。

「ちよお待ってんか！」

そこにいきなり出てきたのはトゲトゲとしたおっさんだった。

もうホントにトゲトゲしてんの、言動がとかじゃなくて見た目が、てか頭が。

「ワイはキバオウつてもんや、ボスと戦う前に言わせてもらいたいことがある。こん中に今まで死んでいった2000人に詫び入れなアカンやつらがおるはずや！」

その言葉に周囲の人たちはざわつく。

「キバオウさん、君の言う奴らと言うのはつまり元βテスターの人たちの事、かな？」

そこでディアベルがそんな質問をした。

「ええ、なんで分かるんだよ……」

つい言ってしまった。でも詫び入れなきやいけない奴らでβテスターになるか？

「決まってるやないか！βあがり共はこのクソゲームが始まったその日にニュービーラを見捨てて消えよった！やつらは旨い狩場やらボロイクエストを独り占めして自分らだけポンポン強なってそのあともずーっと知らんぷりや。」

そこでキバオウは一拍置きこう言った

「こん中にもおるはずやで！βあがりのやつらが！そいつらに土下座さして、貯め込んだ金やアイテムを吐き出してもらわなパーティーメンバーとして命は預けられんし預かれん！」

その言葉にキリトの表情が暗くなる。

「発言いいか？」

声をした方を見るとガタイが良く、さらによく焼けた肌、スキンヘッドそして髭を生やした高身長というなんか、いかにもって感じの人が立っていた。

「俺はエギル（Agil）ってもんだがキバオウさん、あんたの言いたいことはつまり、元βテスターが面倒を見なかったからビギナーが沢山死んだ。その責任を取って謝罪・賠償しろ。という事だな？」

「そ、そうや！」

「このガイドブック、あんたももらっただろ？道具屋で無料配布してるからな。」

ええ、道具屋で貰ってないんですけどお。

ん？あれアルゴからもらったやつじゃね？うん、やっぱりそうだ。
あれガイドブックだったのか…

「も、もろたけど…それがなんや！」

「配布していたのは元βテスター達だ。」

予想していたのだからかキバオウは顔をしかめ、周りの人達は更にざわつく。

「いいか、情報は誰にでも手に入れられたんだ、なのに沢山のプレイヤーが死んだ。その失敗を踏まえて俺たちはどうボスに挑むべきなのか。それがこの場で論議されると俺は思っていたんだがな。」

そうエギルはこの場に居る全員に言った。そしてキバオウの方へ振り返った。

するとキバオウは立場が悪くなったことを察して席に戻ろうとした。
だがそこで予想外のことが起きた。誰かがいきなり笑い出したのだ。

「ブフオウウウウウウ」

はい、俺でした。

いやー、本場のキバオウの「蝶待ってんか!」のときから結構危なかつただけどこまで耐えたんだよ。

だけどダメだったねー、さすがにキバオウさんには勝てませんわ、戦ってないけど。「何か俺の話におかしかったところがあつたか?」

ワアオ、エギルさんの事笑つたと思われてるよ。どうにか言い訳しないと…

「い、いやあ、エギルさんのことを笑つたんじゃないんですよ? 今飲み物を飲んだんですけどお茶が変な方に入っちゃつた気がしてですね… それで吹き出したというかなんというか…」

「そんなん嘘やろーさつきお前さんと目が合つたとき、そんなときも笑いかけてたやろ! ワイの何が可笑しかったんや!」

おいしいiiiiiiiiiiii! なんとなく言い逃れられそうだったのに何してくれとんじやああああああ!

「ほらー言うてみい!」

無いよ! 言う事なんて無いよ! ただひたすらに面白かつただけだよ!

でもなんか言わなきゃまずいよな、ここで何も言わなかつたら会議中いきなり笑いだしたヤベーやつという烙印を押されちまう!

考えるんだ：． 状況を打破できて俺が普通の人だと示せるような何かを：．：．：．
？これならいけるか？

「それじゃあお言葉に甘えて少し発言を。キバオウさん、少し質問いいですかね？」

「なんや言うてみい。」

「それじゃあーつ、あなたはここまでどんな生活を送ってきましたか？」

「なんやそれ：． まあ構わんけど。どうって言われても普通や普通、このクソゲームが始まってから少しの間はパニックで始まりの町に何日かおつて、その後周りのやつらと別の町行つてモンスター狩つてつて感じやけどそれがなんや？」

「いえ、それじゃあもうーつ」

「もうなんや！めんどくさい！早く言えや！」

「あなたがβテスターになぜ謝罪と賠償を求めてたんでしたっけ？」

「覚えてないんか!?めんどくさい、あれや、ビギナーの面倒見いひんくてさらにサポートもなにもしなかったからや。でもまあ多少はサポートしてたんちゃうんか、でもまあまだβテスターを許したわけちゃうからな！」

「そうですか：． じゃああんたもビギナーにアイテムとお金、渡しに行つたらどうだ？」

「どういう事や!？」

「ここにいるβテスター以外の奴らからしたらβテスターにずるいとかせこいとか、更

にはなんで見捨てて行ったんだと思ってるだろ？」

うなずく人が居たのをしつかりと確認してから俺は続ける。

「でもさあ、死ぬのが怖くてまだ始まりの町にいる奴らの気持ち考えてみるよ。βテストとか関係なく、先に行ったやつに対して”なんで見捨てたんだ”って思ってるはずだぜ？ほら、今のお前らと一緒に一緒だ。」

「……………」

キバオウ含めここにいる全員が黙った。

「あとあんたはβテストの何を知ってるんだ？あんたはあれか？1を知って100を知った気になるタイプだろ？あんたの見たβテストは悪質な人間だったかもしれない、だが少なくとも今まで俺が出会ったβテストはバカみたいなお人よしや、良識ある人だったぞ。俺はそういうやつらを一纏めにせずに、個人個人で見たやるべきだと思うんだが？」

「ぐっ……………」

作戦通りくく！このまま押し切ればいける！

「これは蛇足かもしれないが言わせてもらおうぞ。」

「な、なんや！」

「βテストかもしれない奴に命預けも預けられないならパーティー組まなきやい

少し間を開けディアベルが口を開けた。

「攻略会議は以上だ、あとはアイテム分配だが金は山分け、アイテムはゲットした人のもの、経験値はモンスターを倒したパーティーの物とする。異存はないか？」

特に異論反論といった声は聞こえない。

ディアベルはそれを確認し

「それじゃあ明日朝10時に出発する、武器やアイテムの忘れが無いようにしてくれ、では解散！」

こうして第一回攻略会議が終了した。

「サイタマ、アスナ、ボス戦に向けて連携とかの確認をしにフィールドに行かないか？」

「分かったわ。」

「異論無しです。」

「それじゃあ行こう。」

「で？キリト、まず何すんの？」

「最初はスイツチをスムーズに行うための練習だな。」

「了解、誰からやる？」

「ちよつと待つてもらっていいかしら。」

「どうしたんだ（何）？」

「スイツチってなにかしら。」

「ああ……そこからか……」

「なによ、悪い？」

「いや、俺だつて最初は分からなかったからな。ちゃんと教えてやるよ、キリトが。」

「俺かよ……まあいいよ、スイツチって言うのは……」

俺はゲームの専門用語等の指導をキリトに任せ、一人ソードスキルの練習を始めた。

この前よりソードスキルのスピードが上がってんな、レベルが上がったからか？それとも俺がソードスキルに慣れたからか？

なんにしてもこのゲームよくできてんな……

「おーいサイタマ！こっちの座学の方は終わったから実践だ！」

「座学って講義でもしてたのかよ……今行くよ！」

「アスナside」

「私はいまスイッチという基本技術の練習をしていた。」

「ローテーションで練習を行っているのでサイタマとかいう私に説教してきた男は休憩していて、今はキリト君とペアを組んで練習している。」

「モンスターをある程度倒し、ひと段落したときキリト君が話しかけてきた。」

「なあ、やっぱりサイタマの事嫌いかな？」

「当たり前でしょ、あんないきなり私に説教してきて、更には言い逃げするなんて好印象持てるはずがないでしょう。」

「そっか…。でもさ、アイツの言葉の本当の意味を分かってくれとは言わないから考えてみて欲しい。」

「本当の…。意味…。」

「さあ、サイタマと合流して圏内に帰ろう。」

「うん…。」

「なあー二人ともー、早く宿帰って風呂入りたいで急いでくれませーん？」

「こんな奴の言葉に意味なんてあるのかしら…」

「つて、今何て言つたの!？」

「え？早く帰りたいと言いましたけど、なんすか？」

「そつちじゃない！そのあと！」

「風呂に入りたいと…」

「お風呂!?お風呂があるの!？」

「あ、有ります（怖いよ！目が怖いよ！）」

「連れてつて！お風呂に！」

「分かった、分かったから離して！肩がミツシミ言つてるから！」

「早く！早く連れてつて頂戴！」

お風呂！お風呂に入れる！

「アスナもサイタマももう帰りません？」

「いや、俺はさつきから帰ろうとしてるじゃん…」

おつ風呂♪おつ風呂♪

（雄介 side）

今俺の止まつてる宿の風呂にはアスナさんがいらっしやる、どうしてこうなった？もう一度言おう

どうしてこうなった!?

いや、分かつてはいるんだけどね。

ここ一ヶ月女の子がお風呂に入っていないとなると、あのぐらいお風呂に反応を示すのもわからなくもないけどさあ…

男の泊まつてる宿だよ？危機感ねえのか？

ごちやごちや考えてたら風呂から出てきたな。

あらま、顔真つ赤、のぼせちやったかな？

「ええつと、アスナさん大丈夫？」

「え!?!なにが!?!」

「いやあ、顔赤いからのぼせたのかと思ったんだけど？」

「あ、そういう…」

「じゃあ俺も風呂入ってくるわ。」

「えっ、入るの？」

「そりや入るでしょ、俺の借りてる宿だし。じゃ、失礼するよ。」

「あっ…」

男の入浴シーンなんていらないうな？

んじゃあとつと出るか…

外から話し声聞こえるんですけど、アスナさん一人だよな？ひとりごとかな？

ひとりごとってあんなに盛り上がるもんなんだなあ…

「なわけねえだろ！」

思わず叫んじやったけど向こうの部屋で『ガツシャーン！』とか聞こえるんですけど、驚かせちゃったかな？

「サイ坊！どうしたんだ!？」

「ここで状況を確認してみよう。」

タオル一枚の俺、部屋に突っ込んできた何故か居るアルゴ、そしてその奥で俺のことを見てしまっているアスナさん。

つまり何が言いたいかというのだな。

「ちよ、なん d 「きやあああああ！」 待つ、静かにしろよ！」

「いいから早く服着て！」

「で？なんでアルゴが居るんだ？」

「サイ坊が明日のボス攻略に参加するって聞いたから話しようと思つて来たんだ。そしてたらアーちゃんも居て、今仲良くなったんだヨ。」

「あつ、そうすか。んでアスナさんはどうして宿に入れたんでしょうか？」

「いや、あなたの知り合いだつて言うから…」

「将来絶対詐欺に引つかかるぞ…」

「まずオレたちの用件だけ済ませていいか？」

「あ、話あつたんだっけ？何？」

「一言だけだけど、あの情報はあくまでβテスト時の情報だ。油断しないでくれヨ。」

「わざわざ言いに来てくれたのか、ありがとな。もう帰っちやうのか？」

「ああ、オネーサンにはやらなくちゃいけないことが沢山あるからナ。それじゃあナ。」

「おう、また今度。」

「一つだけ言い忘れてたヨ。サイ坊、絶対死ぬなヨ。」

「当たり前だ、もう真つ暗だからとつと帰れよ。」

「そうさせてもらうヨ、アーちゃんもまたナ。」

「ええ、それじゃあまた。」

「アルゴは帰ったか？…じゃあ俺も行くわ。」

「え？どこに行くのよ？」

「いや、別の宿取りに行くんだよ。」

「どうして？」

「どうして、つて逆に聞くけどアスナさんは出会って早々ボロクソ言ってきたやつと同じ部屋に泊まりたいか？」

「それは……でもあなたが取った宿じゃない、出てくべきは私でしょう？」

「俺はこれでも氣遣いは出来る方なんだぜ、女は風呂上り汗かきたくないだろ？それに簡単に人を部屋に入れるやつを外にほっぽるって言うのは氣が引けるしな。」

お母さんが風呂上りに汗かくといつも怒ってたからなあ……

「なっ！……ごもつともです。」

「てことで俺は行かせてもらうぜ！また明日な！」

後ろから聞こえるアスナの叫び声を無視しつつ俺は街の暗がりへと消えていった。

ボス攻略・A New Hero・A New Legend.

「ふああ〜ガハツ、ゴツホゴホ〜」

朝から盛大に咳するってなんかやだな…

さっさと着替えてボス部屋行かねえとな。

それにしても昨日取ったこの宿クツソ汚ねえな。

ホコリとかそういう次元じゃないわ。

寝る前に聞こえた大量のカサカサ音、あれは一生忘れない自信がある。

「ポーションよし！武器よし！防具よし！特殊能力は…もちろん文字化け！」

頭の中に黄色いヘルメットをつけた猫が浮かんできたんだが何こいつ？まあいいや。

無理やりテンション上げると本当にテンション上がってくる気がする。こういう気を紛らわせるのって結構大事だね。テスト前よくやってたよ、勉強してないのにめっちゃ勉強頑張ったわ〜！って自分に言い続けて自信持たせるの。結果は言わずもがなだけ。

「なんか懐かしく感じるなあ…ってそんな思いふけってる場合じゃねえ！ボス部屋行

かないと！」

そう言いながら宿を飛び出した俺だった。

「よし着いた！」

無事何事もなくボス部屋前にたどり着くことができた。

だが

「だっれも居ねえ。」

人が一人も居ないのだ。

まさか又遅刻してしまったか!?!と思い時間を見ると8:00

「マ??」

目覚ましの時間は何時になってるんだ?

目覚ましを見てみると7:00設定.

9:00に設定したはずなんだけど。

それにしても

「2時間も何してよう……」

取り敢えず俺は体をほぐしておくためにソードスキルの練習を始めた。

「こんなもんかな。」

「ねえ。」

「うおおお！誰？誰？……アスナさんか。まだ1時間弱もあるけど早くね？」

「どの口が言ってるのよ、あなたはもつと前から居たでしょう？」

「いや、まあそうなんだけど。で？なんでこんなに早いですか？」

「あなたが宿に居ないし連絡付かないってキリト君が言ってたから探したのよ。」

「あく、メツセージめっちゃ来てるわ。わざわざ探しに来てもらってありがとな。」

キリトにメツセージ送つとこ。

「いえ、別に。」

エリカ様かな？

おつ、キリトから返信来たな、なにになに？ディアベルたちの集団で行きます。

ね………そつかあ。俺1時間アスナさんと過ごすのかあ……

気まずいわっ！

俺とアスナさん全然仲良くないのに1時間で！まあ飯でも食うか。

このクリームのカエスト、キリトに教えてもらっという良かったわ。

これだけでパンが雲泥の差があるからな。

にしても指で塗るけど指にはつかないって、現実では有り得ないからなんか気持ち悪く感じるな。

「ねえ、それなに？」

「パンです。」

「そんなの見ればわかるわよ。そうじゃなくてパンに塗ってるそっちよ。」

「ああ、これ？前の村で出来るカエストの報酬で、パンに塗るクリームだよ。使う？」

「じゃあ……!!？」

そう言つて食べてみると2秒もかからず食べきってしまった。

「え、大丈夫？詰らせてない？」

「ええ、大丈夫よ。」

「なら良かった。気に入ったんならカエストのコツ教えるから行つてみたら？」

「いい、私は美味しいものを食べるためにこの町に来たわけじゃない。私は、私が私でいるためにここに来たの。」

「とどうと？」

「最初の町の宿屋に閉じこもってゆつくり腐っていくくらいなら最後の瞬間まで自分のままでいたい。たとえ怪物に負けて死んでも、この世界には、このゲームには負けたくないの。」

「自分が自分のままで……ねえ。じゃあまずお前の言う自分って何なんだ？」

「えっ？」

「このゲームに怯えて戦いたくない気持ちの俺も、キリトと楽しく日常を過ごしたいと思う俺も、美味しい料理を食べたいと思う俺も、そして現実へ帰る希望を持つ俺も。それらを全部合わせて俺という人物になるんだよ。」

「……………」

「人は誰しも、他人に見せる表面だけじゃなくその正反対の面だつて持つてる。そんなもう一人の自分をどう肯定してやれるか、それが自分が自分であるってことだと俺は思う。あくまで俺は、だけどな。」

気分がノってまた偉そうなこと言っちゃったな、怒ってなきやいいけど。

「もう一人の……自分……………」

「いや、聞き流してくれて良いんですよ？」

偉そうなことべらべら喋ったのを真に受けられるとなんか申し訳ないんですが。

「おーい！サイタマ！アスナ！」

「キリト！」

めっちゃいいタイミング！

「それじゃあ確認するけど、俺ら3人は人数が少ないからボスの取り巻きのルインコボルトセンチネルの排除が仕事だ。俺かサイタマが相手の武器をパリイしたらアスナが決める。それでいいな？」

「了解（分かったわ）。」

「それじゃあ全員揃ったみたいだな。俺から言えることはただ一つだ！みんな！勝とうぜ！」

そんなディアベルの掛け声と共にボス部屋へと入る。

すると部屋の明かりが一斉に付き、ボスが現れる。

こんな演出自分の部屋に付けたいと思ってしまったが、しょうがないと思う。

「A隊C隊、スイッチ！来るぞ！タンク隊は攻撃をブロック！」
ディアベルの的確な指示が部屋に響く。

一方俺はというと

「なんか楽しんで稼げるっていいな。」

「おい、命掛かってるんだからそういう事言うなつて。」

「人生なんていつも命がけだ、あ、アスナさんスイッチ。」

「了解。」

「サイタマお前なあ……これボス戦だからね？わかってる？」

「だからこそ緊張し過ぎないようにしてるんだよ。」

「リラックスし過ぎな気もするけど……スイッチ！」

「おう！つと、やるときはやるからいいだろ？」

そんな話をしながら取り巻きどもを倒していく。

そうこうしてるとボスのHPゲージが赤くなっている。

赤くなっている……ということは！

「俺が出る！」

やっぱりディアベルの攻撃か！

行かないと「キシヤア!!」クソつ！雑魚がまた沸きやがって！

「ッ！」

「サイタマ！大丈夫か!？」

「大丈夫だ……それよりディアベルを！」

「ディアベル？あれは！ダメだ！全力で後ろに跳べ！」

「ぐわあああああ！」

「ディアベルはん！」

「ディアベル！」

「お前どうして!？」

「お前もβテストなら分かるだろ……」

「ラストアタックボーナスか……」

「頼む……ボスを……倒してくれ……みんなのために！」

パリンッ！

無情にもディアベルは俺の目の前で、キリトの腕の中でゲームオーバーになってしまった。

「ボーっとすんなよキリト……俺らがやらなくちゃいけないだろ！」

「ああ、サイタマ、行こう！」

「私も手伝うわ。」

「ああ、頼む。手順はセンチネルと同じだ！」

「分かった！」

「うおおおおおおお！スイッチ！……アスナっ！」

キリトはボスの武器を的確にパリイした。

「くっ、せやあああああ！」

アスナはボスの攻撃をギリギリで避け、鋭い一撃をボスに決めた。

それと同時にボスの攻撃はアスナのフードへと当たり、アスナのフードが壊れた。

なびく栗色の髪、凛々しく綺麗な顔、俺は少し見とれてしまっていたかもしれない。

「っ！あぶねえアスナ！」

ボスがいつの間にか立ち上り、硬直時間中のアスナさんに攻撃しようとしていた。

俺はボスに向けアイテムストレージの中の最後の槍と投げナイフを投げ、ボスの攻撃を防いだ。

「助かったわ、ありがとう。」

「そういうのは勝つてから言え。次くる！行くぞアスナ！キリト！」

「「おう（ええ）！」」

その時ボスのソードスキルが迫ってきていた。

「おらあ！」

自分とボスの武器との間に剣を挟み込み、何とか致命傷を避けた。だが結構な距離を飛ばされてしまった。

「サイタマ！」

「いいから攻撃しろ！」

だがキリトがソードスキルを仕掛けるも、相手の技を見誤ったキリトは攻撃を受け、アスナを巻き込み俺とは別の方向へと飛ばされた。

「二人とも！無事か!？」

「ぐっ、なんとか!？」

キリトがそういうとほぼ同時にボスがキリトたちの方へと向かっている

武器を投げようとするも武器が何一つとして残っていない。

クソッ！さっきのウォーミングアップが仇になったか！

だがしかし、俺の足はボスの方へと動いていた。

武器もねえ、体力もそんなに残ってねえ。でも行くしかない！

もう二度と俺の前で人は死なせねえ！

「仲間を殺させてたまるかあああ!!!」

《覚悟……条件を達成》

「うおおおおおおお!!」

身体が熱い、自分の中から力がみなぎるようだ！これで間に合う！

《特殊能力をアンロックしました。》

そう思っていると違和感が発生する、腰に何かある。

そこには前の世界で放送していた仮面ライダークウガのアークルが装着されてあった。

なぜここに!?

などと、多少戸惑いはしたがこのアークルから感じる力は本物としか思えない。

キリトもアスナも助けるにはこれしかない！と思えば俺はこう叫んだ。

「変身！」

すると走る続けている俺の足が変化を始めた。

そしてボスマでたどり着きボスを素手で殴ると腕にも赤い籠手のようなものが付き、その後真っ赤なアーマーがセットされ最後にクワガタのような赤い目の顔が装着される。

周りのプレイヤーの歓声が聞こえてくる。

「サイタマ……なんだよな？助かった。ありがとう。」

「お疲れ様、ボス戦に勝ったから改めて言わせてもらおうわ、ありがとう。」

「いや、仲間なら当然だろう……」

「それよりその姿どうしたんだ？スキルか？」

「私も少し気になるわ。」

「ああ、それなんだけど「なんでや！」くそっ！」

つい、そう小声でつぶやいてしまった。

「なんでディアベルはんを見殺しにしたんや!？」

「見殺し……？」

「そやろが！自分はボスの使う技知つとつたやないか！最初からあの情報を伝えとつたらディアベルはんは死ななかつたんや！」

キバオウのそんな言葉にプレイヤーたちはどよめきだす。

「それにお前さんもや！なんやその姿は！このゲームにそんな要素無かつたやろ！」

周りからは「βテスターか？」や「チートじゃねえか!？」といった声が聞こえてくる。

エギルがキバオウたちを抑えようとしてくれてるが長くはもたないだろう。

このまま原作道理だとキリトが泥をかぶることになるが、L A ボーナスは俺の元にあ
る……

なら！友達であるこいつに辛い思いなんてさせてやんねえ！

「ピーピーピー騒ぎやがって、てめえらは餓鬼かよ。」

「なんやて!!」

「そうだろ？ 気に入らないことがあればすぐに喚き散らす。おもちゃをねだって泣いてる子供とどう違うって言うんだよ。」

「な、なんやと!!」

「それになあ、元βテスターだとかチートだとか言ってるけど、てめえらはアホか。」

「どういう事や!」

「はあ、考えるぐらいしろよ……βテスターなんてもんは運よく選ばれただけの只の

カスなんだよ!」

そんな言葉にぎわめきが大きくなる。

「それにこのデスゲーム中にチートなんて出来るわけねえんだよ。茅場は天才だ、そんな天才がまずチートできるようなゲームを作るか？ そんなもってチートして自分のキャラがバグったら死だぞ？ それでもチートできると思うか？」

俺は正論と暴言を吐きまくった。

周りのプレイヤーは俺の言ったことが大体合っているため反論することができない。

「じ、じゃあその姿はなんなんや!？」

「これか？これは俺特別のスキルだよ、他の誰にも手に入れることのできない、な。」

「そんなんありかいな……。」

「それじゃあ行かせてもらおうよ、俺の名は「クウガ」だ、じゃあな。」

キバオウの言いたいことも分かる、信頼する人物の死。

それは決して俺の言葉なんかじゃ納得できないだろう、それでも俺はこうするしかなかったんだ。

こうして俺はパーティーの解散とフレンド解除を行いながら、一人次の階層へと向かった。

背中に沢山の非難の目線と、二つの戸惑いの目線を浴びながら……

大きな乖離

1階層ボス攻略後、俺はずっとソロで活動している。

本当にお店以外で人と関わっていないボツチ道を進んでいる。

攻略されている最上階だと攻略組と会う危険性が高いため、ほぼ毎日違う階層に行くという生活を送っていた。

ちなみにだが俺は、クウガという名前は広まっているが、サイタマというプレイヤーネームはあの場にいた人間以外には知られていないらしい。

なんか、噂によるとキリトとアスナさんが他の人に言わないようにと説得したら、渋々納得したらしい。

俺は身バレしないようにあれからクウガに変身していない。

だが、次変身したときにまともに戦えるように、体術スキルを取り体術の練習をしたり、ライダーキックの練習をしたりしている。

ライダーキックの練習はなんかすごく恥ずかしい気持ちになるからあんまりやりたくないんだけどね……

そして今俺は27階層に来ている。

「一月以上振りかな、久しぶりだと謎に楽しくなってきたな。」

テンションを上げながら歩いていると遠くにある人物を見つけた。

「おつ、キリトじゃん。あいつパーティー組んだのか?」

キリト御一行様が狩りを行っていた。

攻略組にはまだ届かないが結構いい動きをしていた。

「あの一人いるだけいる女子、前衛ビビってんじゃねえか。後衛やりやいいのに。」

ん?キリト...パーティー...一人だけ女子...

黒猫ナントカって感じの名前のギルドか!

たしかモンスターハウスでキリト以外全滅するんだっけか?

でもまだみんな生きてるってことは、その事件はこれからだよな。ストーカーって言

われるかもしれないけどこれからずっと後をつけるか...

隠し部屋見つけたっけいな。待機か...ん?なんで扉閉まったんだ?

.....
ここがモンスターハウスか!

「間に合え!」

俺はモンスターハウスに飛び込む。

「サイタマ!?なんで!」

「話はあとだ！フンッ！ソラッ！ウラア！」

入って早々転んでいる男にモンスターが寄ってきていたため俺は武器を適当に投げる。

「死なずに出るぞ！」

そんな俺の言葉に戸惑いながらも全員が返事をした。

「数が減らねえ…」

「キャ！」

「サチ！」

「クソお前から回復は!？」

「もう全員使い切ってる！」

「これ使え！」

俺はキリトの仲間全員にポーションを投げ渡す。

このままだと絶対に何人かは死んでしまう。

クウガに変身すれば能力も高くなるが、この数相手に守りながらとなると分が悪い。でも可能性がそれしかないのなら！

「キリト！そいつらまとめて壁際行つて守つとけ！来た敵だけ倒せばいい！」

「サイタマ?!じゃあお前は...」

「これしかねえだろ！変身！」

俺はクウガへと変身した。

キリトの仲間たちからは「クウガ!?!」「あれが...」といった声が聞こえて来た。

「うおおおお！クア！ウラア！ハア！」

「凄い、あれがクウガ...」

「素手なのにモンスターを圧倒してる...」

「サイタマ...」

得物が無えと流石に押し負ける！

俺にできるのか?... いや違う、やるしかない！

「超変身！」

「青くなつた!」

赤かったアーマーや目は青くなり、アーマーが薄くなることで機動力を得ることのできる姿になった。

そう、俺はドラゴンフォームへと変身した。

つてなぜかメニューが開けない!

「誰か!何でもいい!棒状の物くれ!」

「俺の槍だ!」

「サンキュー!これで戦える!」

俺は受け取った槍を使い表演のような動きをする。

するとただの槍だったものがドラゴンロッドへと変化する。

「俺の槍が!」

「すまん!でも戻るから!」

そんな事を言いながら俺はモンスターに攻撃をしていく。

モンスターはグロンギよりも遥かに弱く、封印エネルギーを込めなくとも2, 3回攻撃を打ち込めば倒すことができた。

「さつきよりも倒すスピードが速い!」

一対多の場面ではやはり武器の有無が大きく左右されるようで先ほどとは比べ物に

ならないほど撃破スピードが上がった。

「!!サイタマー!もうモンスターが沸いてない!そいつらで最後だ!」

「分かった!一気に片付ける!」

いま居るモンスター全てに囲まれた俺はドラゴンロッドの先端に封印エネルギーを込め、横回転をしながらモンスターに攻撃を与える。

刺すような攻撃じゃないのに封印エネルギーが伝わるのか、と心配だったが、通常攻撃2回程度で倒せる相手にそれは杞憂だったようだ。

「ふう……片付い……た……か……」

「サイタマー!」

そんなキリトの叫び声を聞いて俺の意識は遠のいていった。

「んん……」

「サイタマ！気が付いたか!？」

「ああ、おかげさまで……………なんか多くないですかね？」

折角今まで人を避けてたのに、なんでこんなにもあつさり出会つちやうかな…

そう思い、少しキリトに眼を飛ばす。

「どうすれば良いか分かんなくて皆呼んじやった……なんかごめん。」

「いや、まあ呼んじやったのはしようがないからいいけど。」

「サイ坊!」

「はい！なんでしよう!？」

「あの後いきなりフレンド解除しやがって！そしたらいきなり倒れたってキー坊から

メッセージ来テ……………本当に心配したんだゾ……………」

アルゴはそう言つて泣いていた。

流石に俺はこんなところでふざける男ではない。

「……………すまん。」

謝るしかなかった。

「ねえサイタマ君」

「ん？てかサイタマ君って呼んでたっけ?」

「今は関係ないでしょ、それより少し話してもいいかしら?」

「まあ、俺は聞くしかないだろ。この状況。」

「……話すわよ。あれから私はずっと考えてたの、あなたが私に言った言葉の意味を。」

「言葉つて、初めて会ったときの事か？」

「そうよ。あれは私があそこで死なないように、私のために言ってくれた言葉なんですよ？」

うわあ、完璧にバレてるよ。

「たまたま虫の居所が悪かったただけかもしれないぞ？」

「だったらボス攻略前にあんな人生相談みたいなことしてくれないでしょう？」

「……分かった、降参だ。アスナさんの言ったとおりだよ。」

ここまでバレたら嘘つくのもダメだよな。

「やっぱりそうだったのね……私を何度も救ってくれてありがとう。」

久しぶりに会ったら物腰柔らかくなってたアスナさんにお礼言われるとなんかむず痒いな……

「当たり前のことをしたただけだと思うんだが……まあ受け取っておくよ。どういたしまして。」

「サイタマあ！生きてて本当に良かったぜえ！」

「クライン、久しぶりだな。」

「久しぶりって、おめえ初日に分かれてから一回もメッセージくれなかつたじゃねえかよ！それにフレンド欄から消えてるしよお……死んじまったと思つたんだぞ！」

「悪かつたって……でも気にかけてくれてありがとな。」

「ダチなんだからあたりめえじゃねえかよ！」

「こういうクラインの優しさは本当に心が温かくなるな……」

「とうか」というか

「そういえば……どこなんだ？」

「俺の所属してる【月夜の黒猫団】のホームだよ。」

キリトがそう答える。

「そうか。でも団員の人達居くない？」

「大人数が押し掛けてきたから気を使ってみんな、で買い物行く！って言って、ここを空けてくれたんだよ。」

「そうか、それは申し訳ないことしたな。でも、もう俺は回復したからこれ以上迷惑かけないために行かせてもらうよ。」

「あ、いや、黒猫団のみんながサイタマにお礼したいって言ってるから待つててくれないか？」

「あー、了解。」

「それじゃあ俺たちは帰ることにするぜ。」

そう言つてクライン、アスナさん、アルゴは帰る用意をする。

「おう、またな。」

「つとと、フレンド登録忘れるとこだったぜ。」

「あー、解除したままだったか……」

「次オネーサンのフレンド解除したら情報売つてやらないからナ！」

「分かったよ。」

そして俺は皆とフレンド登録をした。

クライン、アルゴが出ていきアスナさんも出ていく時アスナさんが振り返つて話しかけてきた。

「ねえサイタマ君。」

「な、なんでしようかアスナさん。」

サイタマ君とか呼ばれ慣れてないからめっちゃ違和感があるなあ。

「それよ、それ。」

「は？なにが？」

「敬語と呼び方、戦闘中は呼び捨てで敬語抜けてたじゃない。」

「ああ、戦闘中で気が回らなかったな、ごめん。気をつけるわ。」

ミスったな…… さすがに戦闘中でも呼び捨てはダメだったよな。

「そうじゃないの！敬語とさん付けをやめてほしいの。」

「あ、はい。でもなんでいきなり？」

「いや、だって……その……。」

「歯切れ悪いなあ、言い辛いなら別にいいですけど。」

無理して聞くことじゃないしな。

「言う！言うから！ちよつと待つて！」

「ああ、うん。」

「スウ〜ハア〜。よし！私は…… 君と仲良くなりたいの！」

おつとおく、これは予想外。

でもまあ断る理由無いし良いか。

「まあ、これからよろしく。アスナ。」

「うん！」

………
俺キモくなかったよな？心配だわあ。

アスナが帰り、月夜の黒猫団の面々が帰ってきた。

「あっ！目が覚めたんですね。俺は月夜の黒猫団団長のケイタって言います、この度は皆を助けてくれてありがとうございます！」「

「「「ありがとうございます！」「」」」

「いやあ、当然のことをしたただけだよ、ハハ。」

「气まずう！」

マジ初対面の人との初会話がお礼とかキツツうう！

「それでも本当にありがとう、サイタマ。」

「キリト……」

そうだな、死ぬはずだったところを助けることができたんだ。少しぐらい誇りに思お

う。

「さき！料理とかの用意できてますから、快気祝いとお礼を兼ねて祝いましょうよ！」

そう言つて金髪の男子に手を引かれテーブルへ向かった。

俺団長以外からまだ自己紹介されてないししてもないんだけど。良いのかな？まあいいや。

その後は楽しく過ごすごうできた。

なにやら俺が寝ている間にキリトが、1層のボス戦での話や俺の事を話してくれてたおかげで、クウガではなくサイタマとして接してくれた。

いやあ、嬉しいね。

そして帰り際、俺はキリトに話しかけた。

「なあキリト。」

「ん？どうしたんだ？」

「あのメンツとお前のレベル差とかいろいろ考えたんだけど、自分の事話してないだろ

「？」

「……………」

「沈黙は肯定と取るぞ。別に絶対に話せなんて言わねえ。だがな、何を悩んでんのか知らねえけど、お前とアイツらとの信頼はそんな安っぽいもんなのか？ “何か” を危惧するような関係なのか？」

「それはっ……………」

「何でもいいけど後悔のない選択を、悩んで悩んで悩みつくして選ぶことだ。それじゃあな。」

「ああ……………」

折角の再開の後味は少し悪いものになってしまったがきつとキリトのためになると信じておこう。

そして俺たちはまたそれぞれの道へと進んでいった。

男だけの聖夜

今日は12月23日！

クリスマススイブの前日だよ！

皆は誰と過ごすのかな!?

俺は一人で街にいます。リア充ばっかでキレそう。

なんでゲームまでクリボツチしなきゃいけないんだよお

そして今の俺の状況だが、ソロで生活している。

更に人目につかないところで仮面ライダーに変身し鍛えている。

月夜の黒猫団と別れた次の日、特殊能力の欄を見ると様々なものが追加されていた。

バットフルボトル・トランスチームガン・スチームブレード・ビルドドライバー

バーストドライバー

ロストドライバー

イクサベルト・イクサナツクル

たちが追加されていた。

おそらく変身の資格や条件が無いものなのだろうと俺は予想した。

なんだが、このラインナップ少し考えただけでおかしいことが分かった。

まずビルド系の変身アイテムについては追加された物的に、俺のハザードレベルが3に達した可能性があるという事が分かる。

しかしだ、俺はネビュラガスなんでもの浴びていない。それなのに変身できるのはおかしい。

更にビルドドライバーがあるのにもかかわらずバットフルボトル以外のフルボトルが追加されていない。

なら何故ビルドドライバーが追加されたのか、全くわからない。

バーストドライバーは始めセルメダルが無くどう変身すればいいのか分からなかったのだが、コルを消費して変身できるらしい。

ロストドライバーはビルドドライバーと同様にして変身に必要なガイアメモリが無い。

イクサに関しては多分俺が鍛えてたからっていう事かなと思ってるので特に疑問

は無い。あとフェッスル一式付きだったので現代編の方のイクサだと思われる。

いや、でもそしたら鬼になれてもおかしくない気がするけど、うーん、分からん。

沼に嵌ってきたから考えないようにしよう。

ちなみになぜベースにコルが必要かなどを知っていたりするのかわかるといふ事だが、たまに変身している。

だから始めに「人目につかないところで」「クウガ」に変身している。ではなく「仮面ライダー」に変身していると言ったのだ。

てか人目につかないところって言ったけど、実はちよいちよい人前に出てしまっている。

何故かと言うと、危険な状態のプレイヤーを見つけると助けるために戦闘に参戦してしまうのだ。

わざわざ仮面ライダーに変身する理由だが、仮面ライダーの力に慣れるためというものもあるが、一番の理由は格好よくさっさと退散することができるからだ。

意味が分からないかもしれないがこれはとても大事な理由だ。

俺は一度仮面ライダーに変身せずプレイヤーを助けたら「助ける必要はなかった。」だ

の「横取りしやがって。」だの言つて来やがった。

そうならないために仮面ライダーに変身しておくことで「俺の名は仮面ライダーだ。」と言つてささつと帰れば相手は何も言えなくなる。

人助けする時には、クウガは見た目も知られているので、クウガ以外に変身し、「仮面ライダー」と名乗ることでクウガとの差別化を図っている。

そういつた活動をしていたらいつの間にか「救済の英雄仮面ライダー」なんていう本物の仮面ライダーさながらの二つ名がついていた。めっちゃ恥ずかしい。

ライダーの部分がどこから来てるかというところ「サイ坊！聞こえてないの力!？」
おっと、町に来てた理由を忘れてた。

「すまん、少し考え事してたわ。」

「何度も呼び掛けたのに無視なんてひどいゾ！」

「だからすまんって。」

「オレっちを悲しませた罪は重いからナ！今日の情報はコルに加えてもう一つ条件を付けさせてもらうヨ！」

「分かった分かった。なんでもいいから早く情報をくれ。」

「そう急ぐなつて。明日の夜迷いの森のとある樅ノ木の下に現れるみたいだよ。」

とつとと退散すれば条件なんてごまかせるだろ。

「そうか、これはお代のコルだ、それじゃ「ちよつと待とうか。もう一つ条件があるって言った口？」ごまかせると思っただけだなあ」

「何か言ったか？」

笑顔がとつても怖いよ！人殺しの顔だよそれ！

「いえ、なにも…」

「なら良かった。それじゃあ条件だけど明後日の25日にも特別クエストがあるんだ、それに一緒についてきてくれるか？」

「まあそんぐらいだったら構わんよ。」

「それは良かったヨ。それじゃあまた明後日にナ！」

「ああ、また。」

こうしてアルゴは帰って行った。

俺が買った情報とは蘇生アイテムが出るらしいと言われているクエストだ。

らしいとは言っているが、俺はそれがどんなものかはアニメで知っているので、行く価値は十二分にあると思う。

アニメの通りの展開でキリトが荒んでいたら譲るつもりだったが、俺がその未来を回

避させることができたので、とりあえず取りに行くかという軽い気持ちで居る。

そう言えばキリトのその後を言っただけでなかったな。

俺が帰った後、キリトは攻略組という事を打ち明けたらしい。月夜の黒猫団はこれをあつさりとして受け入れてくれたらしい。

しかも、キリトの背中を押して攻略組に復活させたいらしい。なんでも「俺たちは自分の力でキリトに追いつくから先に行つてくれ。」みたいなことを言っていたらしい。

いやあ、粋だよな。

つてことで明日に向けて軽くモンスター狩るか。

絶対いま接続詞おかしかったわ。

さあ、あれから一日が経ち、今俺は特別な縦ノ木とやらを探している。

「確かこのあたりのはずなんだが……!?」

「今なんかブンツツってなった! 楽しかったなあ……」

「おつ、サイタマも来てんじやねえか!」

「おお、クラインも来てたのか。久しぶりだな。」

「ほんとに久しぶりだぜえ! あ、そうだこいつらギルドメンバーだ、なんかあつたら仲良くしてくれよ!」

その言葉にクライン以外のギルドメンバーと俺が会釈をする。

「そういえばキリトは来ないのか?」

「キリトか? あいつはメッセージでは来るって言ってたんだけどなあ…… おつ、噂をしたら来たみてえだぜ!」

綺麗にジャストなタイミングでキリトがやってきた。

タイミングが良すぎたためにここにいた全員がキリトを見つめる。

「サイタマにクラインか久しぶり…… あれ? 俺なんかしたかな?」

「いやあ、丁度今キリト来るかって話してたからよお!」

「なるほどな、そういえばクエストはここにいるみんなで受けるのか?」

「あー、俺は何でもいいけどクライン達は?」

「俺たちもそれで構わねえぜ!」

そう話していたら俺たち以外にもエリアに入ってきたようだ。

「んー、どなた方？」

「サイタマ知らねえのか!?! あいつらは聖竜連合つつつてレアアイテムの為なら危ねえこともするって噂だぜ！」

「サイタマ! クライン! どうする!?!」

「ここは俺らが止めとくからおめえら二人で倒してきてくれ！」

「すまん、助かるクライン! キリト行くぞ！」

「わ、分かった！」

そして無事背教者ニコラスを倒すことができた。

内容? 特に無かったんだけど。

あゝ、でも強いて言うならキリトがトラウマを引きずってなかったから、焦りが無く安全に倒すことができたな。

あと聖竜連合の奴らがクライン達を突破してきてボス戦に乱入しようとしてきたけど、その前に俺とキリトが倒してたから、すつつごい気まずい空気になった後、アイツら帰って行ったな。

後ろ姿に哀愁漂ってたよ。

……………結構あつたな。

「俺には特にドロップ無いな……キリトあつたー!?!」

「んー、あつた!これ蘇生アイテムだ!……けど10秒以内らしい。」

「10秒……脳が焼かれ始めるまでの時間か?」

「多分そうだよな……」

2人は少し黙り込む。

「あつ、そうだキリト。」

「どうした?」

「クライアントに助けってもらったんだしコルぐらいわけないとじゃね?」

「そうだな、さすがに礼儀としてな。」

「おーい!クライアント!」

「どうしたんだ?」

「俺ら二人の手助けしてくれたからコルぐらいは分けなれないと思つてな。」

「いやあ、ダチからは受け取れねえよ。」

「これは最低限の礼儀みたいなものだよ、受け取ってくれ。」

「俺らの感謝の気持ちなんだよ、受け取ってくれ。それでギルドの資金にでも軽く当ててくれよ。」

「キリト：：サイタマ：：分かった！受け取らせてもらうぜ、お前えらの気持ち！」

「おう、役立ててくれよ！」

その後多少の雑談をし、分かれることになった。

「キリト、サイタマ、今日はありがとな！また会おうぜ！」

「おう、またな！」

「ああ、また。」

そしてキリトとも別れることになった。

「いやあ、久しぶりにキリトと一緒に戦った気がするわ。」

「まあ、本当に久しぶりだからな。」

「楽しかったよ、ありがとな。そういえばキリトはここを左だったけ？俺はここ右だ

わ。」

「そうか、じゃあここでお別れだな。また近いうちにでも一緒に狩りに行こうぜ。」
「おう！」

こうして特別イベントであるボス戦は終わりを迎えた。

「いやあく、何事もなくて良かった。」

本当に何もなくて良かった。

アニメの通りだったらキリトが危険だったからな、死人が出なくて良かった。

「明日はアルゴとクエストから、めんどくさいな。」

そう思いつつアイテム、武器整理をしているうちに、いつの間にか寝てしまっていた。

黒の生誕祭

「んん……」

俺はどうやら寝落ちしていたようだ。

アイテム、武器は昨日寝る前に用意し終わってたから大丈夫のはず……もっかい見とこ。

うん、完璧だった。流石俺。

「おつ、アルゴからメッセージ来てる。まあ今日の情報なんも聞いてなかったから、来てなかったらおかしいんだけどね。」

内容は9時に噴水前に集合という事だった。

今はもう8時過ぎだし女性を待たせるのは失礼だしもう出るか。

噴水前に到着した俺だがアルゴの姿が見えなかったためベンチに座って待つことにした。

ここまで三種類の仮面ライダー（ナイトローグは疑似ライダーだと思うけど）に変身してきて、分かったこととか気づいたこととか……そう、感じたことがある。変身解除後に俺の体に掛かる疲労がライダーによって、というか行動によって変わっててた気がするのだ。

バースで言えばクレーンアーム等の特殊装備を使えば使うほど変身解除後の疲労が大きい。

他にもイクサで言えばセーブモードよりもバーストモードの方が疲労が大きいし、フエツスルを使えばさらに大きくなる。ナイトローグは飛行すると、他よりももっと強い疲労に見舞われる。

恐らくこれは使用したライダーやモードのスペックによって疲労の大きさが決まるのだと思う。今は疲労を感じるレベルで収まっているが必殺技連発でもしてみたら倒れてしまうかも知れない。

だがクウガに関していえば疲労はほぼゼロと言える。これはなぜなのか分かっていない。

だからなるべくクウガに変身したいんだが悪名が付いているため、人前ではなかなか

変身することができていない。

てか、このゲーム痛みとか疲れとか感じないはずなのに、クウガとか仮面ライダーに変身するときには痛みも疲労も感じるんだよなあ……なぜ？

そうこう考えている間に9時に近づき、噴水の奥にアルゴの姿が見えた。

「よっ、アルゴ。一昨日ぶりだな。」

「そうだな、それより待たせちゃったか？」

「いんや全然だ、それより今日のクエストはどんな内容なんだ？」

「それなんだがまだ詳細は分かってないんだ。分かっているのは男女ペアって事だけなんだよ。だからオレっち達で調査して午後ぐらいには情報を販売できるようにしようと思つてナ。」

「なるほど、了解。んじゃ行こうぜ。」

「アルゴさん？」

「どうしたんだサイ坊？」

「今日来てるのってクリスマス限定クエなんだよな？」

「そうだゾ。」

「ここどう見てもクリスマス感ゼロの廃墟だぞ？ここ。」

「ソナナコトナイゾ、スゴククリスマスマジヤナイカ。」

「んー！凄い棒読み！それより入ってみようぜ。」

そう、今俺たちが来てるのは、どの地域にも必ず一軒はあると思う壁にめっちゃツタがかかっているでかい廃墟だ。

こんなところでクリスマス限定クエストが有るのか心配になってきたんだが……

「NPCが居たゾ。話しかければクエストが開始するナ。」

全然心配しなくて良かったわ。なんか恥ず！

NPCはめっちゃお爺ちゃんや腰がクルンってしてる。

「チャチャつと始めてチャチャつと終わらそうぜ。」

クエストの内容は、この廃墟で掃除してくれってことらしい。

「なあアルゴ、このゲームで掃除ってどうやるの？」

「オレっちに聞かれてもゲームの中で掃除なんてしたことないからナ……」

「ですよね……おい、あれなんだ？白い影？」

俺とアルゴがうなだれていると廊下の奥の方に白い人影のような何かが見えた。

「モンスターじゃないか？とりあえず行くゾ。」

「了解。ちよつとお話聞いて良いです……かっ！」

俺は白い影に向かって思い切り剣を振った。

「ちよつ、サイ坊なにやってんだ!？」

「いや、HPバーがプレイヤーのじゃなかったし、NPCのマークも無かったし良いかな
っつて。」

「それでいいのかよサイ坊……」

「やることないし戻ろうぜ。」

「まあそうだな。」

俺たちはまたお爺ちゃんの居るロビーに戻ってきた。

「お爺ちゃんただいま……返事してくれないんだけど。」

「クエストNPCなんだから当たり前だ口……」

「まあそうなんだけど、ってあれ？」

「どうしたんだ？」

「いや、さつきよりあの階段綺麗じゃない？」

「確かにホコリが無くなってるナ。」

「俺らがした事ってあの白いの倒しただけだよな？」

「……………」

「サイ坊！あの白いの倒しまくるゾ！」

「おう！」

あれから俺たちは数時間の間、白い影を狩りまくっていた。

あいつらはアルゴの攻撃でも一撃で消滅するレベルの紙耐久だったため倒すのは苦
勞しなかった。

そう、倒すのは簡単だったのだがそこに至るまでが長かった。

壁をすり抜けるわ目の前で消えるわ、おまけに全然出現しないわで、俺とアルゴの精神的HPはボロボロだった。

「アルゴ……この家ピカピカに輝いて見えるんだけどここまでやる必要あったか？」

「……………無かったと思うゾ。」

「だよねえ……」

心がボロボロになった後疲れが一周回ったせいで狩り過ぎた結果、屋敷は作りたてよりも綺麗なんじやいか、というほど輝いている。

「そうだ、早くクエスト終わろうぜ。」

「分かった。今終わらせてくるヨ。」

そう言つてアルゴはお爺ちゃんの方へ向かう。

そしてアルゴがお爺ちゃんのすぐそばに向かったときに異変が起きた。

「アルゴそこから逃げろ！」

お爺ちゃんがいきなりモンスターになったのだ。

だがアルゴは驚いて動いていない。そこへモンスターの攻撃が向かう。

「間に合え！超変身！」

クウガドラゴンフォームに変身した俺はアルゴを抱きしめ、転がりながらモンスターから距離を取る。

「た、助かったよサイ坊。できれば放してくれるとオネーサンは助かるかな?」

「お、おう、すまん。」

少し気まづくなつたところで俺はモンスターを見る。

「断罪者クネヒト……黒いサンタクロースってやつか!」

見た目はまんま背教者ニコラスを黒くした感じだ。

HPバーは4本、クエストボスってところだな。

「アルゴ、行けるか?」

「当たり前だよ。」

「よし……行くぞ!」

攻略は順調に進み、クネヒトの体力バーは残り1本となった。

そこで俺はあることに気づいた。

「なあ、さつきよりアイツの動き遅くねえか？」

「言われてみれば本当だな、それに攻撃力が上がってきてるゾ。」

「スピード落として攻撃力上げるってことか……ならこれだ！超変身！」

俺はクウガタイタンフォームへと変身した。

持っていた武器をタイタンソードへ変形させた。その時だった。

「サイ坊危ない！」

クネヒトの攻撃が目の前に迫ってきていた。

だが俺は避けずに真正面からこれを受けた。

「サイ坊!？」

「大丈夫だアルゴ、安心しとけ。」

そのままクネヒトへ向かいタイタンソードで攻撃を加えていく。

「フンツ！ハアツ！ラアア！」

さつきまでよりも速いスピードでHPバーが減っていく。

「っ、強イ……」

HPバーが赤に突入したので俺はタイタンソードに封印エネルギーを貯め、クネヒトに突き刺す。

「ハアアアア！」

タイタンソードを伝いクネヒトに封印エネルギーが流れ込み、クネヒトの体力が大き
く減り、そのままゼロになった。

俺は変身を解きつつアルゴに向けサムズアップをする。

あのクエストが終了すると俺とアルゴはネックレスをゲットした。

効果はなんと一度だけHPで耐えることができるという、ポケモンのきあいのタス
キ・ハチマキの上位互換みたいなものだった。

このゲームの中ではぶっ壊れ性能とも思えるこのアイテム。そのためかクエストは
1ペアしか受けることができないらしい。

そしてこのネックレスには一つ問題がある。それは

「見た目的にどう考えてもペアネックレスだよな、これ。」

「まあ、そうだな。」

そう、男女ペア、クリスマスという条件からも察せるかもしれないが、このネットワークはペアモノである。

見た目は雪の結晶で、なんともオシャンティーな一品である。

こんなもん付けたこと無えよ……………あ、止めよ、陰キヤがばれる。

アルゴは俺とペアなんて嫌だろうし。

うーむ、どうするか…………

「彼氏でもない奴とペアネットワークなんて嫌だろ？これやるよ。」

性能としては手放したくないが相手の気持ちに優先させないとだよな。

「い、いや、それはほとんどサイ坊の活躍で手に入れたものダ！受け取れないヨ！」

「ペアネットワークだしなあ…………俺はコレ付けてても全然構わないしむしろありがたけれど、アルゴはどうなんだ？」

一撃耐えられるなんて付けたくない訳が無いからな。ペアって事も、よく考えれば俺の装備気にする奴なんて居ないしな。

「あ、ありがたい!?(サイ坊はオイラとペアネットワーク付けたいのか!?)ま、まあ、オレっちもサイ坊とペアって言うのも吝かでは無いからナ…………」

アルゴの奴なんでテンパってるんだろ。まあいいか。

そうして俺とアルゴはネットワークスをほぼ同時に付けた。

「ふーん、俺の方が一回り大きいんだな。」

「合わせられるんじゃないか？」

重ねてみるとまた違った形の雪の結晶になった。

「おお、凄くお洒落だな。これ。」

「ああ、そうだな……」

どうやらアルゴは見惚れているようだった。

少し時間が経ち、コルの分配について話し合い、俺の方が多く貰うべきだとアルゴが言ってきたが山分けを押し通した。

そして帰り道。

「ここでお別れだな。今日は大変だったけど、まあ楽しかったよ。ありがとな。」

「無理言つて手伝ってもらっちゃって悪かったナ。でも助けてくれて……その……ありがとう。」

「おう、気にすんな！てかお礼言えるんだな……」

「なっ！人を何だと思ってるんだ！」

「わ、悪かったよ。」

「ハア…… まあいいヨ。そのネックレス…… 大切にしろヨ？」
「当たり前だ。」

そういつて後ろに手を振りながら俺は宿に向かった。
夕陽を反射し輝くネックレスを首に掛けて……

正義の十字架

俺は今、キリトと一緒に迷いの森というところに来ている。

なんか分かんないけど、よくここに来てる気がするなあ……

そんなことはどうでもいい。

キリトと共に来ている理由はオレンジギルドであるタイタンズハンドを取り締まるために関係者と思われる女を追っていた。

……名前なんだっけ？もう少しで出てきそうなんだけどなあ……

「キリト、あの女の名前何だっけ？」

「ターゲットの名前忘れるなよ。ロザリアだよ。」

「あー、ロザリアね。はいはい。」

ロゼリアかと思ってたわ。バ○ドリやってたせいだね、確実に。

「なあサイタマ、あの女の子一人で森入っていくけどどうする？」

「クリスタル渡されてなかったしなあ……とりあえず見に行こう。」

「分かった。」

そうして俺とキリトは一人で森へ入っていった女の子を追っていくのだった。

「なあキリト。」

「どうしたんだサイタマ？」

「あの女の子どこ？」

「…………… わかんない。」

「だよねえ…………… どうする？」

「探すしかないだろ。」

「ですよね〜」

俺たちは女の子を見失ってしまっていた。

いやあ、無事に町に帰れてればいいんだk 「きやあああああああああ！」
「行くぞキリト！」

「ああ！」

戦いの結論から言うと女の子は死なずに助けることができた。

女の子はと言った意味は

「ピナあ……ピナあ……うう……」

女の子と共に過ごしていたドラゴンであるピナがモンスターにやられてしまったのだ。

「すまない、助けることが出来なくて。」

キリトがそう言った。

俺は重い空気が耐え切れずに口を開いた。

「な、なあ、アイテムが出現してないか？」

「アイテムですかあ？」

女の子が泣きながらもアイテムストレージを確認する。

「あ、有りました。ピナの心……。ピナの形見……」

「やつば有ったか、それは形見なんかじゃ無えぞ。」

「なんで酷い事言うんですか!?!」

えっ!?!俺酷い事言った!?!

「サイタマ、それじゃ説明が足りないぞ……」

「あー、はいはい。そゆこと。」

「むー、二人だけで話しないで私にも教えてください!」

「ああ、そのアイテムと47層にある【プネウマの花】っていうのがあれば、そのピナくん?ちゃん?を生き返らせることができるぞ。」

俺は女の子に詳細を説明した。

「そうなんですか!? 47層……いつか強くなつて取りに行つてみせます!」

「あー、それなんだがピナの心は3日で消滅してしまうんだ。」

そしてキリトが残酷な現実を告げる。

「そんな…… 3日以内なんて……」

少女はまた泣き出してしまいそうになった。

「だ、大丈夫だぞ! アイテム手に入れるのは手伝うから!……キリトが。」

俺は泣かせないように言葉を掛けたが恥ずかしくなりキリトに押し付けてしまった。

「ああそう、つて俺だけかよ!」

「じ、冗談に決まつてるだろ。怖い顔してるぞ。ハハ。」

キリトが睨んできたので言い訳をする。

「ほ、本当ですか!」

「もちろんだよ（おう、任せろ）!」

「で、でもなんで?」

俺はこのままでこの子が死にかねないと思っただけだからなあ……

キリトは何なんだろ? アニメであつたっけ? うーん……

「い、妹に似てたから……」

「ブフォ」

この世界に来て吹き出したのは2度目だなあ。

と、少女を見ると少女もまた笑っていた。俺ほどじゃないけどね。

「ふふふ。」

「わ、笑わないでくれよ……」

あ、キリトがいじけた。

「まあ理由は人それぞれだよな……ンフ。」

「そうですね、別におかしくなんか…… ふふ。」

「笑わないでくれって!」

「まあ、落ち着けて。そういうえば自己紹介してなかったな。俺はサイタマだ。よろしく頼むわ。」

「俺はキリトだ。よろしくな。」

「私はシリカって言います! よろしくお願ひします!」

そう言えば、キリトの理由が面白かったせいと俺の助ける理由を言わずに済んで良かったと思ったのは内緒。

「プネウマの種を取りに行くための会議をするためにキリトの宿へ向かう。するとそこへ

「あらあ、シリカじゃない。森から脱出できたんだあ。良かったわねえ。」

赤い髪の女・ロザリアがやってきた。……名前合ってる？

ふとシリカを見ると少し暗い顔をしている。

「大丈夫？」

キリトが小さな声で聞く。

「はい、大丈夫です。」

シリカは声が小さくなりながらも答える。

あんなことがあったのに大丈夫じゃないだろ…:

キリトを責めるわけじゃないけど大丈夫かって聞かれたら大丈夫って答えるしかないよね。

「あれえ？あのトカゲどうしちゃったの？もしかしてえ？」

「ピナは死にました。でも！絶対に生き返らせませす！」

「へえ、じゃあプネウマの花を取りに行くんだあ。でもあんたのレベルで攻略できるのお？」

こいつ嫌味がすげえな。

言い返してやろ。

「そのために俺らが居るんだよ。」

そう言いながら俺とキリトはロザリアとシリカの間に割り込む。

「あそこはそんなに難易度が高いわけじゃない。」

キリトも言い返す。

「ふうん、あんたらもその子にたらしこまれた口？そんなに強そうじゃないけど。」

「めんどくせ、二人とも行こうぜ。」

そうして今度こそ宿に向かっていく。

今、俺たちは宿の食事スペースにて三人で話をしている。

「なんであんな意地悪なこと言うんでしよう……」

「ゲームの中で人格が変わる奴なんてまあまあ居るからなあ。」

俺がそうつぶやく。

「と言うと？」

「シリカはMMOゲームはSAOが初めてかい？」

「はい。」

「どんなゲームでも人格が変わるプレイヤーは多い、中には進んで悪人を演じる奴もいる。俺たちのカーソルは緑色だろ？だが犯罪を行うとカーソルはオレンジへ、プレイヤーキルを行うとカーソルは赤になる。」

「プレイヤーキル……殺人!？」

「只のゲームなら悪を気取って楽しむこともできた。だがこのSAOは違う。このゲー

「うわあく綺麗……」

シリカがそう言葉をこぼす。

俺も初めて見たときは声に出して綺麗だと言った記憶がある。

その時俺とキリトが異変に気付き目を合わせた。そして次の瞬間、扉を思い切り開ける。

「誰だ!？」

足音が階段下に響いている。今から追うのは流石に厳しいだろう。

「お二人ともどうしたんですか?」

シリカが心配そうに聞いてくる。

「会話を聞かれていたようだ。」

キリトが少し視線を下げながらそう言う。

「で、でもノックをしてからじゃないと部屋の中の声は聞こえないんじゃない?」

「聞き耳スキルって言うののレベルを上げると聞こえるようになるんだよ。まあ、そんなスキルのレベル上げてる奴は変態ぐらいだろうけどな。」

俺は少し悪態をつきながらそう言った。

てか、聞き耳スキルはアルゴとかも上げてるんじゃないやね（超失礼）

「そうなんですか……」

シリカが心配そうに呟く。

俺とキリトも一抹の不安を抱えながら今日の会議が終了した。

翌日、俺たち三人は47層の思い出の丘に来ていた。

「うわあ〜！凄く綺麗！」

シリカは一面に咲く花を見てそう言葉をこぼす。

「このフロアはフラワーガーデンって言って、フロア全体が花だらけなんだ。」

「わあ〜、いい匂い！」

そんなシリカを見て俺たちは微笑む。

キリトが妹みたい、って言ってたけど妹が居たらこんな感じだったのかなあ。

そんな事を考えつつフィールドを進んでいく。

思い出の丘の手前まで来てキリトが歩きを止める。

「キリトさんどうしたんですか？」

シリカが尋ねる。

「シリカ、もしこれから危険な目に遭って、俺が離脱しろと言ったら、どこでもいいからこれで街へ飛ぶんだ。」

そう言つて転移クリスタルをシリカへ渡す。

…………… あつ、そう言えば俺たちオレンジギルド追つてたわ。忘れかけてた。

「で、でも…」

そんなシリカの言葉を少し遮りながらキリトは

「約束してくれ。」

という言葉と共にいつになく真剣な眼差しをシリカに向ける。

「分かりました。」

そんなキリトの真剣さを理解したのか、シリカはクリスタルを受け取る。

「ありがとう、それじゃあ行くうか。ここをまつすぐ行けば思い出の丘だ。」

キリトがそう言い歩き始めてすぐに事件が起きた。

「キャアアアアアア！」

シリカの足に植物モンスターのおツタが絡みついてきたのだ。

シリカは逆さにされながら上空へ持ち上げられる。

「シリカ落ち着いて！そいつ凄く弱いから！」

「いやあ、女の子がああ格好で戦うのはきついつしょ……」

俺はつい言ってしまう。

「シリカに渡す装備ズボンにしとけば良かったかな……」

キリトが申し訳なさそうに眩く。

「キリトさああん！サイタマさあああん！見ないで助けてくださいいいいい！」

「見ないで助けるって達人でもなけりや無理だろ……」

「シリカ頑張れー！」

あつ！キリトこいつ諦めやがった！遠い目をしてやがる！

そうしてるうちにシリカは何とか抜け出し地面に下りてきた。

「見ました？」

「「見えない……」」

まあ、こう答えるしかないよね。

思い出の丘までもう少しと言ったところでシリカがキリトに妹のことについて聞いた。

「マナー違反だとは知ってるんですけど……」

「いいよ。でも本当は妹じゃなくて従妹なんだ。」

「えっ？」

あ、俺まで聞いちゃった。

「生まれたころから一緒に過ごしているから向こうは兄弟だと思ってるはずだけど……そんな事があって俺の方から少し避けちゃってるんだ。」

こういう家庭の事情って知り合いか友達だと聞いてるだけでなんかキツくなってくるな……

「あと、俺の祖父は厳しくて小さいころから俺と妹に剣道をさせてたんだ。俺は2年もせずに辞めちゃったんだが、当然殴られてな。その時に妹が祖父に、私が二人分頑張るから殴らないで、って言ったんだ。妹は全国大会に出場できるまでになったけど、好きなくともできなくなった原因を作った俺を恨んでるんじゃないかって思って……君

を助けたのは妹への罪滅ぼしの気持ちがあつたからかもしれない。ごめんな。」

「妹さん、キリトさんを恨んでなんか無かつたと思います。好きなことでもないのに頑張り続けるなんてできないと思います！だから本当に剣道が好きなんですよ！きつと！」

「剣道が好き……か。慰められてばかりだな、俺。」

キリトの表情が柔らかなものになった。

そんな表情にまたシリカが赤面する。

「さ、さあ……からまた頑張りましょう！」

照れ隠しの為かすぐに歩き始める。

すると足元からモンスターが現れシリカが捕まる。

またか。

「たしかここだよな？」

「ああ、あそこに花が咲く筈だ。」

するとシリカが走って台座へ向かう。

シリカが台座へ近づくと眩い光を放ち花が咲き始める。

「手に取ってごらん。」

キリトの言葉に従いシリカがプネウマの花を手取る。

「これで……これでピナが生き返るんですね。良かったあ。」

「ああ、だがここだと危険だから宿屋に帰ってからするぞ。ピナもこんな殺伐としたところで再開なんて嫌だろ。」

「はい、それじゃあ帰りましょう！」

俺達は帰ろうとし始める。

帰り道、シリカはずっと花を見ながらにっこにっこしていた。

そんなシリカの歩みを俺とキリトで止める。

「おい、居るんだろ！出てこいよ！」

すると木の陰から人が出てくる。

「ロ、ロザリアさん!？」

「私のハイディングを見破るなんて、なかなか高い索敵じゃない。その様子だと首尾よくブネウマの花をゲットできたみたいねえ。おめでとう。」

張り付けたような笑顔でロザリアは言う。

張り付けた笑顔………申し訳ありません、このような格k (r y

こういう場面でふざけるのが俺の悪い癖だな……

するといきなりロザリアの顔つきが変わる。

「じゃ、さっそくその花を渡して頂戴。」

「何を言っているんですか!？」

「ふっ、わりぃがそうはさせねえぜロザリア、いや、タイタンズハンドのリーダーさん

よお！」

俺が威嚇がてら強気で叫ぶ。

「えっ!?!でもロザリアさんはグリーンですよ!?!」

シリカの質問にキリトが答える。

「簡単な手口だ。グリーンのプレイヤーがおびき寄せ、オレンジのプレイヤーのいるポイントまで引き連れてくるのさ。」

「じゃあ最近一緒のパーティーに居たのは?」

「そうよお、戦力を確認して冒険でお金が溜まるのを待ってたの。」

「そう言いながら舌なめずりをするロザリア。」

それに怯えるシリカ。

犯罪臭がスゴイ。

「良い獲物だったあんたが抜けて残念だったけどレアアイテムを取りに行くって言うからねえ……。てか、そこまで分かってたのに一緒に居るなんてあんたらバカ?それともホントに誑し込まれちゃった?」

「フツ、頭が貧弱だなあ。俺らはあんたを探してたんだよ。」

「どういう事かしら。」

「あんた10日前にシルバーフラグスってギルドを襲ったろ、そいつらからの依頼だよ。」

「あゝ、あの貧乏な連中ね。」

「……。リーダーがどんな気持ちで依頼してきたか分かるか?」

キリトが冷めた声で聞く。

「分かんないわねえ。というかこの世界で死んだところで本当に死ぬなんて分からないでしょう？ それよりも自分たちの心配をするべきじゃない？」

そう言うてロザリアが指を鳴らすと周りから数十人のプレイヤーが出てくる。

「キリトさん！ サイタマさん！ 敵が多すぎます！ 逃げないと！」

「大丈夫俺が逃げろって言うまでそこでクリスタルを持って待ってて。」

シリカの頭を撫でながらキリトが言う。

そして俺とキリトは前に出る。

「おいキリト、敵が思ったより多い。警戒は怠るなよ。」

「ああ、でも最初はアレするからな。」

「はいはい、アレね。」

キリトも酷い事考えるよなあ。

「キリト？ サイタマ？」「黒づくめのプレイヤー……」「まさか…… ロザリアさん！ こいつらソロで前線に挑んでるビーターと黒の剣士ですよ！」

「こんなところにそんなやつらが居るわけ無いじゃない！ あんたら行なさい！」

その言葉を皮切りにオレンジプレイヤーたちが俺らに切りかかってくる。

「「「「死ねえ！」「「「「「」」」」」」

俺もキリトもそいつらの攻撃を避けることなくすべて受ける。

「ふ、二人を助けなきゃ……」

シリカが剣を構えてしまっている。

「おいキリト、そろそろ止めないとシリカが……」

「ああ、もう十分だな。」

俺らは平然と会話をする。

数秒すると敵たちは疲れたのか攻撃を止め、肩で息をしている。

「あれ？体力が減ってない？」

シリカが気づいたようだ。

「あんたら何やってんだ！さっさと殺しな！」

オレンジプレイヤーたちは動かない。

「480つてどこか。キリトは？」

「400だ。」

「な、何なのよそれ！」

俺らの会話を理解できずロザリアが質問してくる。

「ん？こいつらの10秒当たりのダメージ量だよ。」

俺が答えてあげた。

「そして俺のレベルが78、HPは14500、自動回復量が500。」

「俺はレベル83、HP15200、自動回復530。つまりお前らはどう頑張っても俺とキリトを殺せないんだよ。」

2人でこいつらに現実を突きつけてやる。

誰が言ったか分からないが、そんなのアリかよ！と聞こえる。

その言葉にキリトが即答する。

「ありなんだよ。たかが数字が違うだけで無茶な差が付く、それがレベル制MMOの理不尽さなんだ！これは依頼主が全財産をはたいて買った回廊結晶だ！お前ら全員監獄に飛んでもらう！」

それにロザリアが答える。

「わ、私はグリーンプレイヤー、私を攻撃したらあんたらもオレンジに……」

「悪いな、俺らはソロなんだよ、数日オレンジになったところでなんの支障も出ねえんだよー！」

ロザリア達には到底追えないほどのスピードでロザリアの後ろに回り、剣を突きつける。

だが、ロザリアはまだ笑っていた。

「良い気になってられるのは今の内だけよ！」

すると遠くから「ロザリアさん！」という声が聞こえる。

「来たわね！さあ、あんたら全員モンスターにやられなさい！」

遠くからタイタンズハンドのメンバーだと思われるプレイヤーが大量のモンスターを引き連れてやってきた。

「なっ!?!あの数はやべえな。キリト、行けるか?」

「当たり前だ、行くぞ。」

モンスターに向かおうとするとシリカが声をかけてくる。

「お二人とも!..... 死なないでください!」

「ああ（おう）!」

こうして俺とキリトはモンスターに向かったのだが、

「強さ的には余裕なんだが.....」

「ああ、数が多すぎる。」

クウガに変身するか? いや、シリカにバレたらまずいか..... なら

「とつとと片付ける!」

そして俺はベルトを腰に巻き、イクサナツクルを手に押し付ける。

レ・ディ・ー

「変身！」

フィ・ス・ト・オ・ン

高めの機械声が聞こえた後、俺の前に金色に透ける鎧のようなものが現れ、俺にぶつかってくる。

すると、俺は仮面ライダーイクサへと変身した。

「サイタマさんが仮面ライダー!?!」

「サイタマだったのか!?!」

「仮面ライダー!?!」

様々な声が聞こえるが、俺はモンスターへと向かう。

「その命!?!?!?! 俺が貰い受ける!?!」

モンスターに対し肉弾戦で次々に倒していく。

「まずは数を減らすか。」

ベルトにフェッスルを読み込ませる。

イ・ク・サ・ナツ・ク・ル・ラ・イ・ズ・アツ・プ

イクサナツクルにエネルギーを集中させ、その後攻撃を放つ。

「ブラウクン・ファング!!!!」

エネルギーが弾丸のように放たれ、モンスターへ向かう。

モンスターに当たると大きな爆発が起き、モンスターの8割がエフェクトとなって消える。

「す、すごい……」

「流石はサイタマだな……」

「そんな……こんなにあっさり……」

「あと少しだな、本気で行かせてもらおう。」

すると顔の十字架が開き風圧が発生する。バーストモードへとモードチェンジする。だがセーブモードよりも負担が大きすぎる。

「クツ… ハア！」

イクサカリバーで次々とモンスターを倒していく。

「これで決める！」

俺はまたベルトにフエッスルを読み込む。

イ・ク・サ・カ・リ・バ・ー・ラ・イ・ズ・アツ・プ

「イクサ・ジャツジメントお！」

横一線にイクサカリバーを振りぬきモンスターたちを一斉に薙ぎ払う。モンスターは勿論耐え切れず全て消えていった。

「フウ… さあ、俺と戦うか？ 牢獄に入るか？」

俺は変身したままそう言うのとロザリアたちは全員牢獄へと入っていった。

こうしてオレンジギルド・タイタンズハンドを壊滅させることができた。

「サイタマ（さん）！」

その声を聞き俺は変身を解除する。

「どうしたんだ？」

「どうしたんだじゃないですよ！サイタマさんがあの仮面ライダーだったんですか!？」

「あのって、どの？」

「人々のピンチに駆けつけ颯爽と助けて去っていくヒーロー、仮面ライダーの事ですよ！」

「まあ、人助けはしてるけど……」

「やっぱり！ファンだったんです！」

「お、おお。ありがとう？」

シリカが詰め寄りながら握手を求めてくるので握手を返す。

「サイタマ、助かった。どうか助けてもらってばっかりだな。」

「そんな事ねえよ、俺だって何回もキリトに助けてもらってるからな。」

「あつ！そうでした、助けて下さってありがとうございます！」

「ま、気にすんな、って言いたいけどお礼は受け取っておくよ。どういたしまして。ほら

キリトも。」

「分かってるよ、どういたしまして。」

「そんじゃ宿に戻ろうぜ。」

もうすぐでキリトの宿に着く。

だが、思ったよりも疲労が大きい……流石に必殺技2連発とバーストモードは不味かったか……

「なあ、キリト、シリカ。ちよつと用事あるから先に帰らせてもらうわ。本当ならピナの復活を見届けたいし、ピナと遊びたいんだけど………すまん。」

「そうですか……少し残念ですけどしょうがないですよね……今度ピナに遊びに来るついでに仮面ライダーでのお話聞かせてください！」

「ちよ、声デカイつて!..... まあいつか、また今度な。キリトもまた今度。」

「ああ、今度な。」

「..... シリカ、頑張れよ。」

「え、ええ!?!」

「ははっ!じゃあな!」

シリカに爆弾を落として俺は自分の止まってる宿に帰った。

宿に帰った俺はベットに横たわると、すぐに寝てしまった。

圈内事件

もう4月に入り、季節は春。

外の世界の季節、気候が反映されるフロアではとても暖かく過ごしやすい気温になっている。

つまり何が言いたいかというと。

「くっそ眠い……」

そう、俺は睡魔に襲われているのである。

今日は攻略会議があるので会場に向かっているのだが、眠すぎてそれどころじゃない。

そんな状況で宿に向かって歩ると、ふとある場所が気になった。

綺麗な草原、そこに生えている木でできた木陰。葉の間からこぼれる木漏れ日。

俺は思った、あそこ絶対よく寝れる。と。

そう思ってしまったらもう後戻りできない。

すぐに草むらに向かい横になった。

ああ…… やっぱり心地いいわあ……

そういえば俺はタイタンズハンドの確保の前辺りから攻略に参加していた。

まあ、クウガだとバレないようにフードで顔を隠しながらだけだね。

そうやって隠してるはずんだけど何故かアスナやキリトにはバレてる。何故？

まあ、そういう事で今日俺は攻略会議に向かったんだが…… 嗚呼、もう寝そ

う……

んん……… なんか周りがうるさくて目が覚めちまったな。
誰が喋ってんだ？

「いくらソロだからって………」

「今日はアイングラッドで………」

声的にキリトとアスナか……

最近アスナは攻略に没頭しすぎて攻略の鬼って呼ばれるぐらい怖くなってるからなあ。逃げよ。

そうして俺がゆっくりと歩き始めたときだった。

「サイタマ君、君にも当てはまるんだよ？」

ウウ・バレテェラ

「はあ…… 一日ぐらい、それもこんな天気の良い日ぐらい休んだっていいと思うんですが。」

「その休んだ一日分私たちの現実での一日が失われていくんだよ!？」
「でも今俺たちが居るのはアイングラッドだ。」

キリトからの援護射撃が来たので一気に攻める。

「副団長さんは寝っ転がってないからわかんないんだよ。日向でも木陰でもいいから

寝っ転がってみ？めっちゃ心地いいから。まあ攻略しに行きたいなら止めないから
いってらっしゃい。」

男二人いるところで居眠りなんてしたくないだろ、早く行ってくれないかなあ、まだ
眠い……

そして俺はまた眠りに落ちて行つた。

あれから30分ほどだろうか、時間が経ち目が覚めた。

言わせてもらおう、どうしてこうなつた。

右には眠るキリト。

これはまだいい、だが問題はこっちだ。

左には、俺の腕に抱きつくアスナ。

うん、訳が分からないね。

てかなんで俺のハラスメントコード鳴ってないの？俺は何されてもいいの？

あつ、そつか、ハラスメントコードあるから俺動けないじゃん。

「ハア。寝っ転がってみとは言ったけども、ハア。」

ついたため息が出る。

そう言えば最近睡眠PKが起こってるんだっけ？こいつら見守つとかなきゃじゃん。まあまず腕捕まれてる時点で動けないんですけどね。

時間はいくらでもあるし情報の整理をしよう。

まず、先日俺の体術スキルがMAXになった。

それに伴い特殊能力、というか、変身できる仮面ライダーに鬼追加された。

言い方悪くて分かりづらかったかもしれないな、つまり俺の使えるアイテムに

変身鬼弦 音錠

変身鬼笛 音笛

変身音叉 音角

が追加されていた。

そこでこの前変身してみようとして音角、音笛、音錠を使って威吹鬼、轟鬼には変身できたんだが響鬼への変身がなんかおかしかった。

不安定というか変身するときになんか違うというか……自分で説明できないわ。

まあ、そういう事で鬼に変身できるようになっ……た!?

心の中の独り言を終わらせようとするといきなりお腹に衝撃が来た。

俺は恐る恐る目を開けてみる。
すると

「ようサイ坊久し振りだな。お目覚めか？」

アルゴが腹に乗っていた。

ねえだからハラスメントコードなんで出ないの!?

てかこの状況おかしいだろ！エロゲか!?

「おう久し振りだな、早く降りようか？」

「これ以上下はサイ坊の……サイ坊はエッチだな。」

「俺から降りろって言ってるの、早く降りないと無理やり降ろすぞ。」

「オレっちに触ったらハラスメントコードが鳴るゾ？（まあサイ坊から触られても鳴らないようにしたけどナ）」

勝てねえ……

女ってこういう時強いよな。

「頼むって、コイツが左腕につかまってるから動けないんだよ。その状態でそこに居られるのはキツイんだって。」

「ん？アーちゃん？……エイツ！」

「なっ!？」

こいついきなり抱き着いてきた!

いや、なんで!?

「離れろって!これは良くない。」

「オイラこのまま寝るからナ。」

「とつとと起き上ってコイツを引き離してくれ。」

「仮面ライダーは一人の安眠も守らないのか?」

「いやそういうもんじゃないつて……えっ?今なんで……

て……え?」

「だってサイ坊は仮面ライダーなんだ口?」

ばれてる?…なんで?

……… まあアルゴなら大丈夫か?結構信用はしてるからな。

「……… ああ、そうだな。俺は仮面ライダーだ。」

「じゃあ安眠を守ってもらおうかな。」

「お、おい!」

……… 無視ですかそうですか。

てか結構大声出したのにキリトもアスナも起きないんですけど。

これって俺が見守つとかなないといけないパターンですよな?

ハア。

時間は分からないが現在陽が落ち始めてきて、太陽がオレンジ色に染まってきている。

「んん……」

おっ、アルゴが起きてきたな。

「おはようさん、どけ。」

「うん…… おはよう……」

目をこすり、寝ぼけながらそう返事してくるアルゴ。

うおお、めっちゃ可愛い。

いつもの飄々とした感じも見た目と合ってて良いけど、今のしおらしい感じはもつと

可愛いわ。

これがギャップ萌え？

てかまたアルゴが寝そうだわ、起こさないと。

「おいおい寝るなよ、起きてもらわないと俺が死ぬ……」

「うーん…… あっ！ 悪い！ 今起きるゾ！」

「助かる。」

俺は何時間同じ体勢で居続けてたんだろう……

やっと起きれ…… ないですね、アスナさんがまだ寝てましたわ。

「なあアルゴ、やっぱりコイツをどかして、って居ねえ!？」

アルゴはすでに遠くの方へと去っていた。

さすがに早すぎじゃね？

「まじかあ、引きはがすの手伝ってもらおうと思ったのに。」

今俺が出来るのは二人が起きるのを待つことぐらいか……

それから数分が経った。

「んん〜！」

おつ、キリトが起きてきたか。

「よっ、キリトおはようさん。」

「ああ、おはよ……俺お邪魔かな？」

キリトの目線の先には俺の腕につかまるアスナ。

やべえ!?!アスナってメインヒロインじゃん!

ど、どどど、どうしよう!?!

これキリトが嫉妬で怒り狂うとか無いよね!?

「いやいやいや!お邪魔なんかじゃないよ!むしろ……」

「むしろ、何?」

「い、いや、何でもない。」

表情的には怒ってないけど大丈夫かな……

なにか話題は……

「そ、そう言えば最近月夜の黒猫団の皆とはどうなんだ?」

「ああ、それなんだがな……」

歯切れが悪いな。

「なんかあつたのか?」

「もつと早く言おうと思ってたんだけどタイミングが無くて……」

「深刻なのか?」

「深刻って言うか……俺、サチと付き合ってる、と言うか結婚したんだ。」

「なるほど、サチと結婚ね……え、？」

あれ？マジ？未来が、結末が変わってる？

ど、どうしよ……

でも今はそれよりお祝いだよな。

「おめでとうキリト。もう二度と彼女、じゃなくて奥さんを危険な目に遭わせんなよ。」

「分かってるよ。でもありがとう。これからも頑張るよ。」

「頑張るのは良い事だけど悲しませるなよ。」

俺はいろんな意味を込めそう言った。

「ああ、もちろんだ。」

恐らくキリトは俺の言いたいことに気が付いてくれたのだろう。真剣な表情でそう言葉を返してきた。

てか今なんかイイ感じになってるけど俺アスナに腕掴まれた状態で寝っ転がってるんだよなあ……

あつ！てか仮面ライダーの事をアルゴに言ったのキリトか聞かねえと！

「くしゅん！」

うお！びつくりした……

どうやらアスナがくしゃみをしたようだ。

てことはやっと起きるのかな？長い戦いだっただけ…

「あ、アスナも起きるみたいだし俺はこれで。」

そう言つてキリトが去つていく。

「ちよ、待つ、まだ聞くことがあるんだけど！」

願いは叶わずキリトは去つていく。

俺の周りは冷たいやつばっかだよ。

「んん…」

アスナは目を開ける。

まあ、もちろんそこには俺の顔があるわけでは…

「キヤー…」

一瞬で俺から距離を取る。

顔真っ赤だけど照れてるんだよね？激怒してるわけじゃないよね？

まあ俺がどう考えても無駄だし会話しよう。

「えつと、おはようさん。よく眠れたか？って聞くまでもないか…」

と、アスナの方を見ると固く拳を握っていた。

え？まじ？俺殺される？

と思つたら拳を開き手を降ろし、こちらを向いてきた。

「ごほん一回。」

アスナは小さな声でそういつた。

「ごほんが一回なに？」

「ごほん一回奢るからそれでチャラ！いい!？」

「いや、別にいらなないですけど…。」

「それでチャラ！いい!？」

先ほどよりも強くそう言われる。

圧が凄い、圧が。

「わ、分かった。」

そして店へと向かうことになった。

店に着いたけど、今すぐに宿に帰りたい！

攻略組の女性プレイヤー、血盟騎士団の副団長という肩書を持つアスナは、さすがに

注目されていた。

そのせいで周りはざわざわしててこつちをチラ見してくる。

ざわざわしてるけど賭博黙示録じゃないよ！

冗談ぶち込んだけどテンション上がんないわ…：

だってアスナが注目されるついでに俺も注目されるんだぜ？

奢られるのにこんなに気分上がんないのは意味が分からんわ…：

そんな風に少し落ち込み気味でいるとアスナが口を開く。

「今日はその、ありがとう。」

「え？」

「寝てる間守っててくれて。」

「あー、なるほど。気にすんな。」

睡眠PKの話だろう。多分。

！
ていうかあなたが俺の腕を話してくれなかったから俺が動けなかったんですけどね

し…：…
「それでもそういう事件が実際起こってるわけで…：… それに見守っててくれた
し…：… ありがとう。」

アスナが少し照れながら言う。

「あー、やべーわ。流石メインヒロインだわ。俺が何も知らないこの世界の住人だったら即惚れてるわ。」

でもメインヒロインって言ってもキリトはサチと付き合つて……結婚してるんだよな？アスナは落ち込んだりしてないのかな？

あつ、お礼に対して無言は良くないよな。

「どういたしまして。あ、そうだ、言った通り寝心地良かったら？」

「ま、まあそれは……」

するといきなり店の外から女性の叫び声が聞こえる。

俺とアスナはすぐに店を出て、叫び声の発生場所を探す。

するとそこには建物に吊るされながら胸に剣が刺さっている男性プレイヤーがいた。

「馬鹿野郎！早く剣を抜け！」

だが、その剣には返しが付いているようで男性は剣を抜くことができない。

「私の上から降ろすからサイタマ君は下で受け止めて！」

「分かった！」

そしてアスナは建物の中へ、俺は男性の足元へ向かった。

だが間に合う事はなく、男性はエフェクトとなり消え、残ったものは落ちてきた剣のみ。

これが圈内事件の始まりだった……

罪の茨

現在俺はアスナと一緒に、ある女性と話をしている。

「ええと、あの男性プレイヤーの知り合いとの事ですけれど、お名前を聞いてもいいですかね？」

「は、はい。私はヨルコ（Yorko）って言います。」

「どんな関係だったか聞いても？」

「わ、私、さつき殺された人、カインズ（Caynz）と友達で、あと、前に同じギルドに居たんです……。それで久しぶりに一緒にご飯を食べて、少ししたらはぐれちゃって……。そしたら……。あんなことに……。」

ヨルコさんは泣き出してしまった。

「そのとき誰か見たりしなかった？」

ヨルコさんの背中を撫でならアスナがそう質問する。

「一瞬なんです……。カインズの後ろに誰かが立っていたような……。」

「その人影に見覚えはあった？」

無言で首を横に振る。

「その… 失礼だけどカインズさんが恨まれるような事あったりしますかね？」
また首を横に振る。

その後ヨルコさんは顔を俯けてそのまま話さなかった。
まあ当たり前だろう。友人が目の前で死ぬなんて……

この後、この状態のヨルコさんを一人で帰すのは危ないという事になり、俺とアスナで送っていった。

「すみません、こんなところまで送ってもらっちゃって……」

「気にしないで。それよりもまたお話聞かせてくださいね？」

「はい……」

アスナがそう優しく声をかけヨルコさんと別れた。

「んで、これからどうすんだ？」

「情報を整理しましょう。そしたら犯人に近づけるかもしれない。」

「了解。まずはあの剣の事についてだな。俺鑑定スキル持ってねえしなく。副団長さんはどうよ？」

「ねえ。」

「え？どうした？」

質問したの俺の方だよな？なんで俺が質問され始めてるの？

「私、君の事ずっとサイタマ君って名前で呼んでるよね？」

「え？うん、そうだけどいきなりどうしたの？」

「なんで私の事は名前で呼んでくれないの!？」

は？

「は？」

「前まで名前で呼んでくれてたのに!どうして？」

「いや、どうしてと言われましても……」

「私、君に嫌われるような事したかな？」

いつもより小さな声で聞いてくる。

「え、えつとですね……血盟騎士団の副団長になって立場が前と変わったっていうのも

あるし……ね？」

「ていうのも、つてことはまだあるんでしょ？」

悲しそうにしながら聞いてくる。

勘弁してくれよ…こんな場面出くわしたことはないからどうすりや良いのか分かんねえよ…

「い、いやあ、攻略とか攻略会議でいつもピリピリして対応してくるから嫌われてるもんだと…」

上の二つは本当に事実だ。

攻略会議で「アスナ」って呼んだら血盟騎士団の奴らに殺されるんじゃないか、つてぐらい睨まれるし、しょうがないだろ…

そんな事があり俺は最近、「アスナ」と口にだして呼んでいない。

そのせいでこんなことになるとは思っても無かったんですけど。

「そ、それは副団長の立場としてなの！不快だったよね、ごめんなさい！」

「いや、まあ構わないですけど…」

女子に頭下げられるのキツイなあ。

「対応を改善したらまた名前で呼んでくれる!？」

「えっと…それは難しいですかね…」

だつて周りの奴らがねえ。

「やっぱり私の事嫌いなんだ……」

うっ、泣かれそう。

「そ、そうじゃなくて！俺が名前で呼ぶと血盟騎士団とかの周りの連中が睨んでくるんだよ……」

「へ？なんで？」

「なんでつて……美人女性プレイヤー・大手ギルド副団長。そんなプレイヤーが、よくわかんない男に名前で呼ばれて名前で呼んでるんだぜ？そりや睨まれるだろ。」

「美、美人……な、なら！しばらくは知ってる人だけが居る時は名前で呼んでくれる？」

「まあ、それなら良いけど。」

「よ、良かったあ……」

ええ……？そんなに大事ですかね、名前呼び。

「つて、こんな話してる場合じゃなくて事件の事を……」

「こんな話じゃない！大事な話だよ！」

「あつ、ハイ。すみません。ええと……大事な話？も済んだことですし、そろそろ事件について話しません？」

「そ、そうね。あのスピアについて鑑定できる人は……」

「エギルが鑑定スキル持ってたはずだからお店行こうぜ。何回か行ったことあるから。」
「分かったわ。行きましょう。」

ん？今スピアって……

「つて、ちよつと待ってくんね？」

「どうしたの？」

「今スピアって言ったよね？ 剣じゃないの？」

「スピア、槍よ、それ。」

マジかよ！

「早く言つてよく、俺ずつと剣つて言つてたじゃん。うわー、恥ず。」

「ふふふ。良いから行きましょう。」

「ちよ、笑わないでほしいんですけど……」

少し時間がたちエギルの店の前に着いた。

店に入ろうとすると一人のプレイヤーが出てくる。あまりいい顔をしていない。

まあ、この店の価格設定微妙に高いからなあ。

「よおエギル、久しぶりに来たぜ。」

「おお！本当に久し振りだなあサイタマ、またドロップ品売りに来たか？つておい！お前とアスナつてあんまり仲良くなかったはずだよな？ど、どういうことだ？」

と、めつちや動揺しながら聞いてくる。

「ちよつとした事情があつてな。その事情について話があつて来た。聞いてくれるか？」

俺が真剣な表情で話すと、エギルの方も真剣な表情になる。

「ああ、話してみろ。」

「なるほど、圏内でHPが……」

「ああ、だが情報や状況からして睡眠PKの可能性はないし、突発的なPKである可能性もほぼ無いだろう。これは計画されたものだと思つて間違いねえな。」

「それでこのスピアが。」

「そう、刺さつてたんだ。鑑定頼めるか？」

「ああ。」

エギルは鑑定をし始めた。

「分かったか？」

「ああ、これはプレイヤーメイドだな。」

「そうなのか？」

「誰ですか？ 作成者は。」

俺とアスナがほぼ同時に聞く。

「グリムロックってやつらしい。聞いたことねえな……少なくとも一線級の刀匠じゃ

ねえ。それに武器自体も特に変わったところは無い。」

「でも、手掛かりにはなるはずよ。その武器の固有名は？」

「ギルティーゾーン。罪の茨ってとこだな。」

そう言つて俺に渡してきた。

「そうか……なあ、この武器に変わったところは無いんだよな？」

「ああ。」

「なら……ふっ！」

俺は自分に剣……じゃなくて、槍を刺そうとして振り下ろす。

「ダメッ！」

するとアスナに手を掴まれ、ギリギリのところまで槍が止まる。

「えっ?なに?」

「なに?じやないでしょう!その武器で実際に死んだ人が居るのよ!」

机に身を乗り出して俺にそう言うてくる。

「だけど特別な効果は無いって言うし、それに本当にこの武器でHPが減るのか知つく必要があるだろ?」

「そんな危ないことはしないで!これは、エギルさんに預かっておいてもらいます。」

俺から槍を奪い取ってエギルに渡す。

「お、おお。」

驚きながらもエギルが受け取る。

こうして鑑定が終わった。

帰りの用意をしているとエギルが話しかけてきた。

「なあサイタマ、やっぱり噂って本当だったのか?」

「ん?噂?」

「知らないのか?噂ってのはアスナとアルゴ、二人と付き合ってるって噂だ。」

「……………は?え、なに、そんな噂あんの?てか二人と付き合ってる?え?」

「お、落ち着けよ。」

「いや、どうやって落ち着けと？」

「いや、悪かったよ……それで、付き合っでは無いんだな？」

「ああ、てか二人と付き合うってどうやるんだよ……」

「それにしても気をつけろよ。」

「どういうこと？」

「いまお前さんはキリトと並ぶ女たらしのプロとして多くのプレイヤーに知られてるからな。」

「ええ……」

意味が分からん。バカしかいないのか、このゲーム。

「何にせよこれからがんばれよ。」

「あ、ああ。サンキュな。」

やっぱエギルは良いやつだよな……

「まあ、俺個人としては修羅場の展開も見てみたいけどな。」

「少しでもお前をいいやつだと思った俺がバカだったか……」

「ハハハ！」

うわー、イラッと来るわー。

一発頭はたいてもいいかな。

アスナの用意も終わり、エギルの店を後にした。

そして俺とアスナは、今日は解散することになった。

「なあアスナ。」

「!!な、何かしら。」

「さつきはすまんかった。」

「本当だよ!すつごく驚いたんだからね...」

「これからはああいう事に気をつける。本当にすまんかった。」

「分かってくればいいの。」

「それじゃあお休み、また明日。」

「うん!おやすみ!」

宿に帰ってきた俺は今日の事を考えていた。

まさかアスナが、名前で呼ばれてないことを気にしていたなんて気づかなかった。結構悲しかったっぽいし、申し訳ない事してたな……

明日はまたヨルコさんとの話か。

事件解決まで頑張ろう。

事件の真実

今日は事件の翌日。雨が降っている。

なんか日本語が変な気がするけどまあいいや。

俺とアスナ、更にキリトがヨルコさんに話を聞いている。

「ねえ、ヨルコさん。あなた、グリムロックって名前に聞き覚えある？」

アスナが聞くと、ヨルコさんは驚きでだろうか、目を見開き少し上体を反らす。

その後、口を開いた。

「はい。昔、私とカインズが所属していたギルドのメンバーです。」

「……カインズさんの胸に刺さっていたあの槍、鑑定した結果、作成したのは、そのグ

リムロックさんだったんだ。」

ヨルコさんは口を手で覆い、先ほどよりも大きく目を見開いた。

「思い当たる事、有ったりしない？」

「……はい、有ります。私の所属してたギルドは黄金林檎って言います。半年前、たまに倒したレアモンスターが敏捷力を20も上げるアイテムを落としましたんです……」

その内容は、要約するとアイテムを巡ったいざこざって事だった。

さらに、そのいざこざの末にギルドのリーダーであるグリセルダさんが謎の死を迎えたらしい。

「昨日、お話しできなくてごめんなさい。忘れたい、あまり思い出したくない事だったの……」

「い、いえ。昨日は突然の事でしたから。」

「それにしても、レアアイテムを持ってフィールドには出ないよな。」

「となると睡眠PKか。」

「半年前と言えば手口が広まる少し前だわ。」

「偶然とは思えねえな……」

「グリセルダさんを狙ったのは指輪の事を知っているプレイヤー……つまり。」

「黄金林檎の残り七人の誰か……」

ヨルコさんが呟いた。

そこでキリトが続ける。

「中でも怪しいのは売却に反対した3人だな。」

「売却する前に指輪を奪うためにグリセルダさんを襲ったって事？」

「恐らく……グリムロックさんって言うのは？」

「彼はグリセルダさんの旦那さんでした。グリセルダさんは優しくて強くて美人で、グリムロックさんはいつもニコニコしてて、凄くお似合いで、仲の良い夫婦でした。もし昨日の事件の犯人がグリムロックさんなら、指輪売却に反対した3人を狙っているんでしょよね……」 指輪の売却に反対したのはカインズとシュミットというタンクと…… 私なんです。」

その言葉に俺もアスナもキリトも、驚きで少し身を乗り出した。

「シュミットっていう人は今どこにいるか分かるか？」

「私知ってるわ。」

「アスナが？」

「ええ、彼は聖生連合所属、攻略組よ。というか少しは周りの人の事覚えてたらどう？」

「あー、頑張るわ。」

攻略組にいたとは……

てか、仲いいわけでもないのに名前なんていちいち覚えてられねえよ……

「シュミットを知っているんですか？」

ヨルコさんが結構強めに聞いてきた。

「ええ、ボス攻略で顔を合わせる程度だけけど。」

「私をシュミットに合わせてくれませんか。彼はまだこの事件について知らないんです

「だからもしかしたら彼もシュミットと同じように……」

「それじゃあシュミットさんと呼んでみましょう。聖生連合に知り合いがいるから、本所に行けばどうにかなると思うわ。」

「それじゃあまたヨルコさんを宿屋に送らないとだな。」

「ああ。ヨルコさん、俺らが来るまで絶対に扉を開けないでくれよ?」

「はい、分かりました。」

そしてヨルコさんを送り届けた後、聖生連合へと向かう。

てか、やつぱり雨の中傘を差さずに歩くのはなんか悪い事してる気になるな……

「二人はこの事件の手口、どう思ってる?」

そんなアスナの問いにまずキリトが答える。

「3つは考えられる。一つ目はデュエルによるPK、二つ目は既知の情報や技術によるシステムの抜け道、三つ目は完全にシステムを無視できるスキル・アイテムの存在……だが、この三つ目は有り得ないだろうな。」

「どうして?」

「フェアじゃないから。このゲームは基本的にフェアネスを貫いている。そんなSAO

が圈内殺人を認めるはずがない。」

「へえ…… サイタマ君はなんか考え付く?」

「俺か?俺は…… もう少しつてところかな。」

「もう少し?何が?」

思い出すべき記憶……なんて言えないしな。

「情報のピースがっつてところだよ。」

「なにか思いついたら教えてね?」

「ああ。」

…… それにしても俺、こんなに物忘れ酷かったっけか?

少し忘れてたにしても、実際に起きたら思い出すと思うけど。

まあ、そんな事考えるより今は事件の手口を思い出さないと。

シユミットを呼び出し、ヨルコさんの話し合いを再開する。

「グリムロックの武器でカインズが殺されたというのは本当なのか!」

「本当よ……」

…… ヨルコさん毛布を肩にかけてるけどそんなに寒いかな？

「なんで今更になつてカインズが殺されるんだ？…… という事はアイツが指輪を…… グリセルダを!? それともグリムロックは売却に反対した俺達3人を全員殺すつもりなのか!?…… クソツ！」

「グリムロックさんに槍を作ってもらつた、他のメンバーの仕業かもしれないし、もしかしたら…… グリセルダさん自身が復讐してるのかも。だって圏内で人を殺すなんて幽霊でもなければ……」

「なっ!? そ、そんなこと……」

…… これは事件当事者になるとよくある支離滅裂な発言だな。

こうなつたらあんまり会話を聞かずに自分で考えるか。

犯人でも事件の手口でも分かれば全部思い出せる気がするんだけどなあ。

指輪の件は、動機には関係してるだろうが今は考えなくていいだろう。

情報を整理しよう。

あの日はヨルコさんとカインズさんが一緒にご飯を食べていて、その後はぐれ、探していたら槍の刺さったカインズさんを発見。

ん? ご飯を食べるだけだつたらなんで鎧なんか着てたんだ?

多分ココが重要な気がするな。

うおっ?!いきなりヨルコさんが発狂し始めたよ。

ビビるわあ……勘弁してよ。俺チキンなんだから。

ヨルコさんは窓の柵みたいなところに腰を掛けた。

窓開いてるのに危なくない?

「お前はそれでいいのかよヨルコ!こんな訳の分からない方法で死んで良いのか!」

ヨルコさんにとびかかりそうなシユミットをキリトが抑える。

……この間は一体何ですかね。

するとヨルコさんはビクツツとしてそのまま窓の外に落ちる。

その時背中に短剣と思われる武器が刺さってるのが見える。

キリトは走ってヨルコさんを助けようとする。

「ヨルコさん!」

だが、健闘空しくヨルコさんは落ちた先でエフェクトとなり、消滅してしまった。

「アスナ、サイタマ、あとは頼む!」

「危ないわよ!」

そんなアスナの静止も聞かず、キリトは何かを見つけたようで、窓から外へ飛び出す。

少し時間がたち、扉が開く。

敵襲の可能性もあるため、俺とアスナは剣を構える。

だが、そこに居たのはキリトだったので剣をしまった。

「無事だったか、キリト。」

「馬鹿！無茶しないでよ！……で、どうなったの？」

「……ダメだった。テレポートで逃げられた。宿屋ならシステムの的に安全。ここなら危険はないと思い込んでいた。クソツ！」

そう言ってキリトは壁を殴りつける。

「あのローブはグリセルダのものだ……あれは、グリセルダの幽霊だ！ハハツ、幽霊なら圏内でPKするのも楽勝だよな。アツツハハハハ！ハハハハハハ！」

シュミットは震えながら言う。

パニツクになつてな……

「幽霊じゃない。二件の圏内殺人はシステムのロジックがあるはずだ、絶対に！」

キリトはキリトで少し意地になってるな……

場所を移動し、噴水前に来た。

「あのロープ、本当にグリセルダさんの幽霊だったのかな？ あんなことが目の前で二度も起きると私にもそう思えてくるよ。」

「いや、そんなことは絶対じゃない。そもそも幽霊だったら転移結晶なんて使わないで消えられるはずだ。」

転移結晶ね……

あれ？ そういえばヨルコさん、一回でも背中見せてたっけ？

……… 見せてないな。窓に寄り掛かるときも後ろ向きで動いてた。

鎧…… 背中を見せてない……… 転移結晶………

これなら……… いや、確証が無いな。

後で検証を……

「……… マ君、サイタマ君？」

「ん？ああ、悪い、少し考え事してた。」

「邪魔しちやった？」

「いんや、そんなことは無いな。それで何の用だ？」

「あ、そうそう、これ。」

「サンドイッチ？くれんの？」

「みせびらかすだけなわけないでしょう？キリト君はもう食べてるわよ。」

「マジだ、気づかなかった。それじゃあ有難くいただくわ。」

「はい、どうぞ。」

俺はサンドイッチにかぶりつく。

「うつま。」

「ホント!?嬉しい、ありがとう!」

「おう、本当……って、ありがとう？これってアスナが作ったのか？」

「うん、そうだよ？」

「マジか……」

俺も料理スキル取ってるけどこんなに上手に作れないわ。

「何よ、私だって料理ぐらいするわよ。」

「いや、そう言うわけじゃないんだけど……てか、これ女子の、それもアスナの手作り

か…… テンション上がって来たな。」

アニメキャラの、それもメインヒロインの手料理とか、オタクとして最高ですわ。

「えっ!？」

「ん?なに?」

「もう、バカッ!」

何故にビンタ!？」

嗚呼、野菜が少し地面に落ちちやつた……

野菜がエフェクトとなって消える。

「…… やっぱりか。」

「何が（ファミハ）?」

キリト、口に入れながら喋るなよ……

「この事件の手口が分かった。」

「ええええええええ!？」

「…… という事で、装備の耐久値が切れた瞬間に転移結晶で飛ぶ。すると死んだよ

うに見えるってわけだ。」

「なるほど……」

「そういう事だったのね……」

結局俺は、思い出したというよりも、自力で気づくことができた。

俺、マジで記憶力お爺ちゃんになっちゃったかな……

「だからカインズさんもヨルコさんも生きてるはずだ。ほぼ確実に。」

「じゃあ、黒いローブの男は……」

「カインズさんだろうな。」

「この方法を使ってシュミットがグリセルダさんの殺人の犯人なのかを暴こうとしたんだらうな。」

「そうだ、アスナはまだヨルコさんとフレンド登録したまんまだよな？」

「ええ、ちよつとまって…… 19層に居るみたい。」

「19層になにかあったつけ…… まあいいや、俺らができるのはここまでだな。あとは彼らの問題だ。」

「ああ（ええ） そうだな（そうね）。」

俺達は、無事に終わったという事で食事に来ている。

それに、ご飯奢るって言われて結局何も食べずに終わったからな。

「何事も無くて良かったな。」

「だね。それにしてもキリト君とサイタマ君ならレアドロップしたときどうする?」

「うーん、俺はそういうトラブルが嫌でソロやつてるところがあるからな…。」

「俺はその時その時で対応だな。」

「うちはドロップした人のもの。そういうルールにしてるの。」

「大手ギルドなら複雑なルールがあるもんだと思ってたけど、結構単純で分かりやすいんだな。」

「SAOって、誰がどんなアイテムをドロップしたかは全部自己申告じゃない? だからトラブルを避けようとすると思うししか無いじゃない?」

「まあ、そう考えると合理的だな。」

「だから結婚というシステムに重みが出るのよ。結婚すれば二人のアイテムストレージは共通化されるでしょ? 結婚したら何も隠せなくなる。ストレージ共通化って凄くブログマチックだけど、同時に凄くロマンチックよね。」

プラグマチックってなんや？

というか

「アスナって結婚したことあるのか？」

俺がそう聞くとアスナがフォークを構えて机から身を乗り出す。

なんで!?!怒られる要素ある!?!

キリトまでため息吐いてるし。ええ……

「えっ!?!ごめんって!結婚システムの詳細知ってたし、ロマンチックとかプラ……プラ……まあいいや、とか言ってたからしたことあるのかと思って……」

「プラグマチックです!ちなみにプラグマチックって言うのは実際的って意味ですけどね、念のため!」

「实际的?SAOでの結婚が?」

うお!?!飯食いまくってたキリトがいきなり会話に入ってきた!

地味に体がビクツってなっちゃったよ……

あ!アスナ俺のほう見て笑ってやがる!恥ずかしいわあ……

「そうよ、だって身も蓋も無いでしょう?ストレージ共通化なんて……ふふっ。」
ツボってんじゃねえよ……

ん?!

「キリト? どうしたんだ?」

「アイテムストレージ共通化って結婚相手が死んだときどうなるんだ?」

「そういうことか...!」

「え?」

アスナは上手く理解できず聞き返した。

「アイテムが共通化されるときに片方が死んだときってどうなるんだ?」

「グリムロックさんとグリセルダさんの事? 片方が死んだときは...」

「「全て、もう片方の物になる(んじやないのか?)」

「!?という事はグリセルダさんのストレージに入っていたレア指輪は...」

「犯人ではなくグリムロックのストレージに入るはずだ。」

「指輪は奪われていなかった?」

「いや、奪われたであってるだろ。グリセルダさんのストレージから...グリムロックがって事だろ。」

「という事は...あの三人が危ないんじゃないか!」

「アスナ! ヨルコさんはまだ19層か?」

「ええ!」

「それじゃあ行こう!」

「19階層…… やっぱり気味が悪いな。」

俺は今一人でヨルコさん達の居る場所に向かっている。

いや、ボツチでもないし二人に嫌われてるわけじゃないよ？

俺がこっちに向かい、二人がグリムロックを探す。そういう算段になっている。

だから俺はボツチじゃない！

…… 最近一人の時間が短くなってるからちよつと寂しいな。

つと、こんな事考えてる場合じゃないな。ヨルコさん達が見えてきた。

ん？人数多くね？なんだあのフード三人組。おもしろ。

いや、俺もよくフード被ってるからそんな事言えねえじゃん！！

…… フードの奴ら何やってんだ？

ナイフか!?

しかも誰も動けてない。麻痺付きか！

「三人とも大丈夫か!？」

「ま……麻痺が……」

「見りや分かる！死んでねえなら良い！それでテメエらは誰なんだ？」

「おいおい忘れちまったのかブラザー？」

「その声……プーか。その手の……ラフィンコフ笑う棺桶だっけ？悪良い趣味味してんじゃん。」

チツ、会いたくない男に会つちまった。

「覚えてくれてたなんて嬉しいぜ。ギルドの事もご存知か、嬉しいなあ！」

「俺は今すぐにも忘れたいな。てかそんなでつかい包丁どうした？此処にキツチンは

ねえぞ？」

怒つてくれると扱いが簡単になるんだけどな。

「H A H A！言つてくれるな！」

まあそう簡単にはいかないよな……

「なあヘッド！コイツ俺がやっていい!？」

うわつ、喋り方キツイな、コイツ。

「そんな興奮すんなよ。禿るぜ？」

「あ？」

よし、このまま全員の気が俺に向いてくれれば三人に被害が行かない。それでハツタリかませば勝ちだろ。

「そつちのあんたは何も喋んないのか？あつ、声に自信ないんならゴメンな。」

俺はニヤニヤしながらそう言葉を放つ。

すると無言で剣を抜きだした。

確実にプー以外の二人は俺にヘイトを向けた。

「二人ともやる気満々なのにお前は白けたままか？プー。今なら出血大サービス、三人同時に相手してやるぜ？」

「ハッ！乗ってやるよ。イツツ・シヨー・タイム！」

その言葉を合図としてラフコフの三人が俺に襲い掛かってくる。

俺はどうか三人の攻撃を捌いていく。

そしてヨルコさん達に目線を送り、逃亡を促す。

が、腰が抜けているのか、立ち上がれていない。

それでも必死に、どうか逃げさせられないか手当たり次第に合図を送る。

「ぐっ！」

「おいおい、よそ見かよ。」

「ハッ、口だけかよ。」

攻撃への対処が疎かになってたか！

「さつきからあの三人の方ばかり見ていたな？」

流石にバレてたか…

「そんなにあいつらが気になって戦いに集中できないなら…先に殺しとくか？」

「なっ!？」

「ザザ、やれ。」

ザザと呼ばれた無口な方の男は、エストツクの先端の向きを俺からヨルコさん達の方に変え、歩き出す。

「やめろお！」

俺は止めようと走り出すが、バランスが取れず膝から崩れ落ちる。

「へへへへ、麻痺毒だよ。動けないでしょう？そこから人が死ぬの、見とくといいよ。」

言い終わると、また奇妙な声で笑う。

そうしてる間にも、ザザがヨルコさん達に近づく。

ここで立ち上がれなかったら俺はまた、後悔なんて言葉で収まらないほどの感情に？

まれてしまう！

なんのために俺には仮面ライダー力があるんだ!?

誰かのために一步を踏み出すためだろ!!

「あああああああ!!!」

麻痺がどうした!

「なに?」

「立ち上がるか!期待以上だぜ!」

「俺の目の前で、もう殺させねえ!」

俺は右手に変身音叉 音角を持ち、左手の指で音叉をはじく。

キーン

金属音がフィールドに響く。

そして、そのまま音叉を額の前に持つてくると、額に鬼の顔が浮かび上がる。

体が、赤く発光し、それが青紫の炎に変わる。

「なんだ?」

プー達だけでなく、ヨルコさん達含めたこの場の全員が俺の事を注目していた。

「あ?ハッ!」

ナイフが飛んでくるが、炎に阻まれる。

「これは... スキルか?」

見たことのない状況に、プーはそんな考察を溢す。

そして尚も俺の体の周りの炎は燃え盛る。

「ラァー！」

限界まで燃え上がった炎を、右手で薙ぎ払う。

「H A H A！これは想像以上だぜ！」

「鬼？鬼!!ヘツド！俺こいつやっついていい!？」

「まあ落ち着けジヨニー、さつき言つてたことを思い出せ。三人同時に相手、してくれるよな？」

プーは落ち着けと言いながらも、自分も興奮している。

「男に二言はねえよ。さあ、かかつてきな。」

……嘘です。めっっちゃ怖いです。

頼むからヨルコさん達逃げて、めっっちゃ逃げて。

本気で殺しにかかってくる相手三人をどう対処すればいいんだよ……

俺は殺さず、殺されないように音叉剣で攻撃をいなしていく。

「ふっ！はっ！」

「オイオイどうしたあ!?!そんな攻撃聞かねえぞお！」

「うるせえ！イカレナイフ！」

「ああ!?!」

煽ってヘイトを稼ぎまくれば相手の行動がなるんだが……

「H A H A！俺とも遊んでくれよサイタマ！」

「……………」

コイツだけは全くブレねえ。

プーさえ折れてくれれば負けないんだが。

「つとーあぶねえな！包丁は子供みたいに振り回すおもちやじゃねえんだぞ！あと、おめえは不気味だからなんか喋れ！」

ザザとプーが同時に行ってきた剣撃を、何とか捌きつつ文句を発する。

プーの包丁の剣、友切り包丁メイトチョッパはたしか、人を切るとステータスが上がってモンスターを切るとステータスが下がるんだったか？

クソツ！すでに何度も攻撃くらっちゃまってる！

てか、デスゲームと化したこの世界で、そんなPKを勧める武器があるとかマジでイカれてんな。

「よそ見なんて余裕だな！」

「ぐッ！」

戦闘中にアホなこと考えてるんじゃないか！

ヨルコさん達の方は…… やつと麻痺状態が回復したか。

とつとどこから退散して欲しいんだが。

そのためには

「ウオラッ! どうしたんだよお前ら! キレがねえぞ!」

「ああ!? 急かさなくても今すぐぶっ殺してやるよ! オラア!」

今俺ができることである時間稼ぎを全力で行うしかねえな。

少しでもヨルコさん達から離して、こつちに寄せられればいいんだが……
つて

「キリトとアスナ!?!」

「サイタマ! …… だよな?」

「えっ!? モンスター!?! でもサイタマ君の声もしたし…… え!?!」

「俺はサイタマ 「ムシしてんじゃねえよ!」 アホか! どこに投げて……」
なっ!?

あつちにはヨルコさん達が!

「間に合ええええええ!!」

思いっきり跳躍し、4本以上は確認できたナイフを体で受ける。

「があああああッ!」

麻痺も…… 付いてんのかよ……

「HEY！まだ終わりじゃないぜ！」

空中に飛んだままの俺に対し、プーは友切り包丁を全力で振りかぶり、俺に叩き付ける。

「なっ——」

その勢いで、俺は何メートルも吹き飛ばされた。

そこで俺の意識は途切れていた。

事の終結

くキリトsideく

「サイタマ（君）!!」

俺とアスナがそう叫ぶ。

消滅エフェクトは見えていないからまだ死んでいないはず!

……だがサイタマは返事を返さない。

耐え切れずにアスナと共に駆け出す。

しかし物事はそう上手くはいかない。

「おっと、どこに行こうとしてるんだ?」

「プー…!!」

「おいおい、そんなに睨むことねえだろ?」

行く手を阻むプーを俺とアスナが睨む。

「良いからさっさとそこをどけよ」

そんな俺の怒気を孕んだ声が響く。

「そいつはできない相談だなあ……おい、お前ら」

そう声をかけるとプーの陰からザザとジョニーが出てきて俺たちに襲い掛かる。

「そこを……どけよ！」

俺とアスナが足を一步踏み出す

「うおおおおお（はあああああ）！」

く雄介 side

「いつつつつつてえ!!!」

これあばら骨数本逝っちゃまってらんじゃないか？

てかそれにしても

「これHP残ってるの？」

1ミリも残ってるか分からないほどに微かに見える赤いHPバーを見て背筋が凍る。

「と、とりあえず回復だよな……」

今も恐らくキリトとアスナがあいづらと戦ってるはずだからすぐに向かわねえと！

そう思い回復結晶を取り出した時だった。

「俺はまだ生きてると信じてたぜブラザー」

「マジカー、このタイムミングカー」

ツイてないとかそういう次元じゃねえぞこれ。どんぐらい飛ばされたか分からんけど来るの早すぎでしょ！

てかどーしよつかなあ…… HP少ないのバレたら秒で殺されそうだしなあ……

ブラフでどうにか切り抜けられたらいいんだけどなあ。

そう思いそつと回復結晶を背中の方に隠す。

さあどう出るんだ、プー。

「H A H A！そう構えるなよブラザー！良い戦いだっただぜ。じゃあな」

は？

いや、意味分からん。あいつは帰ったのか？

取り敢えず二人と合流する……か……

「うっ……」

そう言葉を溢し、地面に膝をつく。

やつべえ……体が言う事を……聞かな……い……

そこで俺の記憶は途切れた

おはようございまーす!!!

いやあ、響鬼としての初陣がP O H戦だったのは流石にきつかったかな。死んだように眠るっていうのを実感できたよ。やったね!

いや嬉しくねえよ……

てかあの後どうなったんだろ。

キリトとアスナに聞きに行くか。

そこで体を起こそうとするが違和感に気づく。

………は?

いやいやいや、ここどこ?

取り敢えず一旦状況を整理しよう。

普通ならここは俺の取った宿のはずなんだがベットはおろか椅子も机も何もない。

てか真つ白。バグか?

(そつと足元を見る)

ゑゑ!?

俺どこに立ってんの
????

足元も真っ白だよ!!?

怖いって!怖いよ!?

「あっ」

このとき雄介は恐怖で足を絡ませてしまい思い切り前に倒れてしまう

?
これ倒れたらそのまま終わりのないバンジージャンプみたいなことにならないよね

なあ、誰か教えてくれよ、てかマジでここどこー!?

この間僅か0.02秒の事だった

「ぎやあああああああ!!!」

「うわあああああ!」

「ぎやああ……あ?」

「はあ…… はあ…… お願いします……」

叫び過ぎたせいで息切らしたわ！（逆ギレ）

「ええ…… 怒られても困るなあ…… つと、それじゃあ自己紹介します！どうも神です
！」

「はいどうも神さんですね。よろしくお願いします。」

……… 中二病患者だったか？

「違うよ!?というか心の声読んでもんだし信じてくれても良いんじゃないかな!」

「いや、だってよく考えたらここSAOですよ？茅場の技術なら心の声ぐらい余裕かなーって」

「え……… じゃあこの空間！ここは神っぼいでしょ！」

「自分今フルダイブ型の「うるさいよ！」ええ………」

「こんなことならゲーム開始前に接触すればよかったよ………」

泣きかけちゃってるしずっとブツブツ言ってるよ……… はあ

「分かりましたって信じなくてすみませんって。神様って信じるんでそろそろ元気出してくれませんか？」

「本当だね？信じるね？今言質取ったからね？」

「だから信じてますって………」

「よし！それじゃあ話を再開するからね！ってああ!!」

「うおっ!? どうしたんすか？」

「余計なことに時間をかけすぎたせいでもう時間切れだよ！」

「いや、それはまあすんません」

「とりあえず今度またここに呼ぶからその時はスムーズな話し合いを頼むよ？」

「うい、了解です」

「ホントに分かってんのかなあ…… それじゃあまたね」

その言葉を皮切りに目の前が眩い光に包まれた。

いや、まっぶぶ!!!

「ん、んん……」

自分の体の感覚が戻ってきたため雄介は目を開け周りを見渡す。

「良かったあ……普通の部屋だ……」

でも俺ここがどこか分からないんだけど。

取り敢えず歩くか。

そう思い足に力を入れるも動かない。

え？重くね？どゆこと？

そう思い足の方を見る。

するとそこには俺に寄り掛かって寝ているアスナがいた。

エエエエエ!?!?

ナンデ!?アスナサンナンデ!
!?!?

つと、こういうときほど冷静に、クールにいないと「んっ」おほーーー
いや、冷静とは○
!!!??

とりあえず起こささないようにどうか「サイタマ君？」なあ!!
うっそだろオイ。

さつきからことごとくダメダメだなあ。

てか、まずは返事だよな。

「ど、どうも、サイタマです。」

いやなんだよ どうもサイタマです つて!?

サザエさんの次回予告の名乗りかよ!?

マジで恥ずかし過ぎるだろ…………

「サイタマ君!!!」

「のわっ!?!」

そんな事を考えていたらいきなりアスナが抱きついてきた。

もう一度言おう、アスナが抱きついてきた。

「よ、か、つ、た、ー!」

「ちよ、え?まつ、ええ?」

おっとこれは予想外過ぎて吐きそうだわ。

「どうしたんだアスナ!」

ここに来てキリトが登場つてのも予想外だわー（諦め）

って、あれ？今の状況は………

ドアを開け俺達を見るキリト。

テンパって何もできずわたわたしてる俺。

泣きながら俺に抱きつくキリトのヒロインであるアスナ。

んん？これ俺死なない？大丈夫？キリトに殺されない？

「サイタマー！目が覚めたんだな！」

不安で胃袋吐き出しそうになってた俺にキリトが声をかける。

セーフか!?セーフっぽいよな!?!てかセーフであつてくれ!

と、内心ビビりつつも返事をする。

「お、おお。今さっきな」

よっし!セーフだろこれ!

「そうなのか!それにしても目が覚めてくれて本当に良かったよ……」

「そんな大げさなあ、ちよつと寝ただけだろ?」

そう俺が声をかけると、二人は顔を見合わせアイコンタクトを取った後こつちに視線

を戻し、口を開く。

「サイタマ君」

真剣な面持ちに声が少し上ずる。

「は、はい何でしょう?」

「……君はあれから十日間も眠ったままだったの」

「ああ、なるほどね……」

ん? いまアスナ十日間って言ったか?

十日間ってあの十日間か?

「十日間って時間に表すと240時間な、あの十日間?」

「そうよ」

あー、やっぱそうだよなあ……

「それなら俺も付いていくよ。ってことでサイタマは少し待っていてくれ」

「応」

そう言つて二人は今いる部屋から出て行つた。

にしても十日間か…… あんなよくわかんないところでよくわかんないヤツとちよつと話してただけなのに十日も経つのか。

世界つて不思議だなあ（遠い目）

十日もあつたらキリトやアスナとかにレベル抜かされてそうだな…

最前線に戻るためにもここから頑張つていかないとな！

バン！

「ウエイ!?!」

気を抜いて考え事をしているといきなり大きな音がした。

「「サイタマ（サイ坊）（さん）！」「」」

「なんでおめえはいつも無理しちまうんだよ！もつと俺らを頼ってくれよう…。」

「クライン…。」

「サイ坊はなんでそんなにすぐ倒れるんだ!?オレツチの身にもなってくレ、心配するんだゾ…。」

「アルゴ…。」

「サイタマさん！すごく心配したんですよ！」

「シリカ…。」

俺、こんなに心配してくれる仲間ができたんだな…

そして俺は大きく息を吸ってから口を開いた。

「みんな心配させてごめん!!あとありがとう!!こんな頼りない俺をこれからも支えて欲しい」

嬉しくてつい流れるように言っちゃったけど結構恥ずかしいな。

「もちろんだぜ!」

「当たり前だろ?」

「私なんかで良ければいつでも!」

「みんな……ありがとう!」

その後は圈内事件の事について少し話した後解散になり、部屋に残ったのは俺とア

スナだけになった。

気、気まずい…………

何か会話を切り出さなければ。

「こ、今回の事はその、心配かけてすまんかった」

「本当よ、私がどれだけ心配したと思ってるのよ…………」

「………… すまん」

俺に気まずさを紛らわせるような会話は無理だったか……

「もう………… もう絶対心配かけさせないでね？」

「あ、ああ。わかったよ」

そんな自信ないけど、みたいなこと言おうとしたけど涙目＋上目遣いには勝てんかったよ…

「よし！それならこんなしんみりした話はもうおしまい！サイタマ君はこれからどうする？まだ此処に居る？」

「いや、もう充分元気になったし自分の宿に帰ることにするよ。」

「そっか。それじゃあまたね！」

「ああ、またな。」

別れの言葉を交わし俺は部屋の扉のドアノブに手を掛ける。が、振り返ってアスナに問いかける。

「そういえば……どこ？」

特訓と16連撃

「二年……か」

キンキンと刃がぶつかり合う音をフィールドに響かせながら俺は呟く。
すると隣で同じように剣をふるうキリトが反応した。

「ゲームが始まってから、だよな？」

「お、おう」

聞かれてるとは思っていなかったため、少し反応が可笑しくなったがまあいいだろう。

今は2024年の10月。さつきも言った通り、このソードアートオンラインが始まって二年ほどがたった。

そして、俺がこの世界に来てからも約二年がたったことになる。

現在73層まで攻略されており、近づく74層ボス攻略、クォーターポイントでもあ

る75層ボス攻略に向け、最近はこうしてキリトとダンジョンでレベル上げに没頭している。

サチはいいのか?と聞いてみたら「俺の考えに結構理解を示してくれてるんだ、サチは」みたいな亭主閑白じみたセリフを吐くもんだから、こいつらの結婚生活は大丈夫なのか?とか、キリト、なかなか男らしく変わったな、とか考えてたら、つい鼻で笑っちゃってPVPに発展したこともあったなあ。

なんて思い出したら、俺もキリトも最後の一匹のリザードマンを撃破し息をつく。

「そうか、もう二年も経つんだよな…… 変わったよな、俺もサイタマも」

「まっ、会ってから二年も経ったからな。いろんな経験積めば変りもするだろ、男の子なんだし」

「男子、三日合わざればってやつか?今に関して言えば、そのベクトルの話ではないと思うけどな」

「同じようなもんだろ、会うたびに強くなって来るしょ」

「んー、この微妙な会話の噛み合わなさ」

「まあ、わざとなんですけどな」

「わざとかー…………素だと思ってたけど」

「わお、俺ってキリトに結構おバカさんだと思われてる？」

「えっ？」

「えっ？」

モンスターを狩り終わった安心感からか、変なボケを挟んだが、軽めに返事を返してくれたキリトににやけ顔を向ける。

目が合うと笑を抑えきれずに2人して吹き出してしまふ。

一頻り笑うと、キリトはさつきとは違う、獰猛な笑みを浮かべ俺を見る。

「もちろん今日も、やるよな？」

「当たり前だ」

もしかしなくても、俺もキリトと同じような顔なんだろう。

全身の血液の温度が上がってきたように錯覚する。

少し距離を開け、PVPの通知に迷わずYESを選択する。

カウントダウンが始まった。

俺は腰にロストドライバーをあて、端子の青いジョーカーメモリを構える。

対するキリトは、両手に剣を構えこちらを見据える。

残りが10秒を切ったあたりで、俺はドライバーの差込口にメモリを差し込み、横に倒すと同時にある言葉をつぶやく。

「変身！」

J o k e r

そうベルトからライダーの名を告げられた後、機械音が周囲に響き、俺は装甲を身にまとう。

「仮面ライダー…：ジョーカー…：…」

どちらともわからない眩きが漂ったのち、両者は全身に力を入れる。

「さあ………」

「行くぞ！」

「行くぜ！」

そこからはノンストップだった。

手を止めることなく、キリトは剣を振り続け、俺はそれをいなしながらカウンターとして拳をお見舞いする。

……何分が経ったのだろう、二人の息はとづくに上がっており、残る力は少ない。

「なあ、これで……」

「ああ、これで……」

「決めるツツ!!」

俺はマキシマムスロットにジョーカーメモ리를差し込み、ボタンを弾くように押し込む。

キリトはソードスキルの構えをとる。

j o k e r

M a x i m u m D r i v e

「ラアアアアア!!!」

「スターバーストストリーム!!!」

キリトの二刀流から放たれる連撃をいなしながら、必殺の一撃を繰り出す隙を見極める。

連撃のスピードが下がった瞬間、右手に入れる力を最大限にまで上げる。

「!!、今ア!!!」

「アグッツ」

鳩尾へと突き刺さる俺の右手に、声にならない声を出すキリト。

それと同時にレッドに入った両者の体力だが、キリトの方が多く削れており、勝者は俺となった。

「また、負けか」

「今回は、俺も、危なかった」

肩で息をしながら会話をする俺達。

「帰ろうか」

「そうだな」

疲れ切った俺は、もちろんキリトの提案に賛成し、帰路に就く。

迷宮区を出てしばらく森を進むと、キリトとは道が少し違うため別れることになった

今日の試合でも使っていたキリトのユニークスキル、二刀流。あれは圈内事件の数週間後、キリトに打ち明けられたものだ。

「3ヶ月ほど前」

「サイタマ、来てくれて助かった」

「まあ連絡くれたら行くだろ、普通」

「それでもだよ」

今日はキリトに呼ばれて、キリトの泊ってる宿まで来ていた

「んで、用ってなんなんだ？」

「サイタマってさ、スキル持ってるよな。他の人にはない。」

「あー、変身の事か」

「そう。そんな一人しか持っていないスキルを持つてるお前だからこそ話を聞きたい」

「そんな改まってどうしたんだ？」

「えーとだな、周りの目って言うのはどんな感じなんだ？」

「周りって言われても、俺公表してねえしなあ……」

「あ、ああ。そうだったな、変なこと聞いた」

なんだ？今日のキリト、焦ってるというか冷静じゃないというか……

回りくどい事聞いてくるなあ。

「結局なにが聞きたいんだ？」

「…… サイタマには変に隠そうとしない方が良くよな、これを見て欲しい」

キリトが見せてきたスキル欄、そこには二刀流の文字があつた

二刀流…… なんて俺は忘れてたんだか、キリトと言ったらこのスキルだよな。

「サイタマはこのスキル見たことあるか？」

「俺は無いな…… アルゴには？」

「聞いてみたけど同じだった」

「つまりこれは俺と同じ、ってことだよな？」

「多分、そういう事だと思う。」

「そうか…… ちなみにキリトはこのスキルについてどのぐらい理解してるんだ？」

「両手で剣を持つてもソードスキルを使えるってことぐらいかな」

「なるほどな……」

折角こんなに早くユニークスキルがあることを俺に教えてくれたんだ、少しぐらいは力になってやりたいな……

よし、俺にできることは一つだけだよな！

「よしキリト！特訓すつぞ！」

「…… え？」

「だから、特訓だよ特訓。いつまでもウジウジしててもしょうがないだろ？そのスキル、モノにしちやおうぜ」

「…… ああ、そうだよな、こんなに後ろ向きなのは柄じゃなかったよな。お願いするよ、特訓」

「よっしゃ、決まりだな。んじゃ早速迷宮区行くぞ〜」

「え、ちよ、今から行くのか!? まっ、サイタマ!？」

「はよ行くぞ〜」

うーむ、思い出すと結構に強引だった気がするけど、まあ今更か。

あれから結構立つけどキリトは相当二刀流スキルを使いこなしていると思う。

考えてみると、仮面ライダーに対して剣二本でいいとこまで行くんだぞ？人間から半歩ぐらいはみ出てると思うんだが。

って、あそこに居るのキリトじゃね？なんでここにいった？

「おーい、キリト？」

「おつ、サイタマ。いいとこに来てくれたな」

「良いところといますと？」

「これ、見てくれよ」

そこに書いてあったのはラグーラビットの肉だった。

「……………マジ？」

「まじなんだな、これが」

「始めて見たわこんなレアアイテム……………」

ラグーラビットの肉ねえ、こいつラック高すぎだろ。

ニヤニヤしながら自慢してきやがって。

「どうせ奥さんに手料理振る舞ってもらうんだろ？」

「ま、まあ。今さつきメツセージ送ったところだな」

ハア… まったく、羨ましいやつだ。

って、おろ？ あそこにいる白い毛玉は…

あるものを見つけた俺は小声でキリトに話しかける。

「あれって、もしかして噂のラグーラビットだよな」

「あれは、もしかしなくてもラグーラビットだな」

それを聞いた俺は、投げナイフを構えた。

ソードスキルを発動させ、勢いよく俺の手から離れた投げナイフは、一直線にラグーラビットへと向かっていく。

「キュウウウウー！」

俺とキリトの間に、何とも言えない空気が流れる。

「ラ、ラグーラビットの肉。ゲットだぜ！」

「勢いでゴリ押したな」

「うるさいわい！あの空気感は耐えられんわ！」

「まあ、それは俺も同感だけどさ」

2人して、手に入れたラグーラビットの肉を見つめ、黙ってしまふ。

「今度こそ帰るか」

「そうだな」

さつき別れたばかりなのに、もう一度さようならを言う状況に、心の中で笑みをこぼしつつも宿に向かっていく。

宿に着いた俺は、アイテム欄にあるラグーラビットの肉を見つめる。

「どーすっかなあ、これ」

料理スキルを育てていない俺は、ラグーラビットの肉を料理できるはずもなく、ただただ見つめ時間がすぎてゆく。

最悪キリトに頼んで、サチさんになんか作ってもらうか？
でもなあ、結婚してる人にそれ頼むのは流石に無いよなあ……
うーん、でもそれ以外に方法は

バンバンバンバン！！！！

そんな事を考えていたら、突然ドアを叩かれる音がした

「ねえー！居るんでしょー！サイタマ君ー！」

俺には聞こえない。

ドア越しに話しかけてきてるアスナの声なんて、まったく聞こえてない。
ないったらない！

「ねえええ、いるんでしょー！サイタマ君ってばー！………はあ」

そろそろ諦めてくれるか？

「スウ……」

息を吸い込む音が微かに聞こえてくる

「ラグーラビットの肉を手に入れたサイタマく〜ん！」

「おいしいいいいい!!!なに言っちゃってんのおお!!こんな声の響くところで叫ばないで!!!」
「だって〜、サイタマ君出てきてくれないし……」

それを言われると、完全に俺が悪いから反論できないんだよなあ。

「分かった分かった、いいから入れよ」

「やった！」

「そんなに喜ばれても何もねえぞ?……いや、ラグーラビットの肉はあるな」

「そゆこと〜」

全く、現金なやつだよ……

2人きりの夕飯

ラグーラビットを討伐した後に、なぜか宿まで突撃してきたアスナ。

「そういえば、なんで俺がラグーラビットの肉を持つてることを知ってたんだ？」

「キリト君に教えてもらったの」

「キリトが言ったのか!？」

あいつ……勝手に言いふらしやがって。

ん？キリトからメッセージ届いてたの気づかなかったな。

なんだって。

『俺だけが美味しく料理された肉を食べるのは、なんか申し訳ないだろ？料理できる奴を向かわせとくよ』

…… あいつマジか。

「てか、それよりも重要なのは、俺の居る宿、どうやって突き止めたんだ？」

「それはアルゴさんから」

「あの鼠があ……！」

なんで住所ばらまくんですかね……

流石に個人情報があかんでしよう。

ま、過ぎたことはしょうがねえか……

あの二人、どうお仕置きしてやろうかなあ？

「てか、アスナの料理スキルはどんなもんなんだよ」

「ふっふーん、先週コンプリートしました！」

「な、え、マジ？」

「まじです！」

料理ができるって程度のレベルじゃないな、こりや。

「え、んで、料理してくれるってことで良いのか？」

「じゃなかったらここまで来ないでしょう？」

「ありがてえ……神かよ……」

「そ・の・か・わ・り、半分は貰いますからね？」

「もちろんもちろん。シエフが食べないなんて、有り得ないからな」

「やった！それじゃあ行こうか！」

交渉が終わったと思ったら、どこかにつれてこうとするアスナ。

「えーと、どこまで行くご予定で？」

「私の部屋よ」

「んー、聞き間違えかな？今、アスナの部屋に良くって聞こえたんだけど」

「そう言ったんだけど」

え、は、こいつ馬鹿なん？

そろそろ夜になるって言うのに、男を自分の部屋に上げるか？普通。

「なんでわざわざアスナの部屋まで？」

「逆に聞きますけど、サイタマ君の部屋にはちゃんとした料理道具があるの？」

「…… すんませんでした。ほとんどなんもないです」

「だと思ってた。だから行くわよ」

「分かりましたよ……」

料理食いに行くためだけにアスナの部屋行くって、なんか気まずい気もするけど、しゃあないか。

話がまとまり、アスナの部屋に向かうことになった。

「それじゃあ行こう…… ってうおおおおお
!?!?!?!」

部屋を出た瞬間、目の前に骸骨みたいな顔をした、辛気臭い男が立っていた。

「おたくどちら様？ 服的に血盟騎士団っぽいけど……」

そう話しかけるが、重ねてくるようにその男は喋り出す。

「アスナ様!!どちらに行かれたかと思えば、こんなよくわからん男の家に上がり込むなんて」

よくわからんなんて、言ってくれんじやねえか。
てか、コイツの方がよく分からんだろ。

「クラデイル(Kuradeel)、なんでこんなところまで……今日はもういいわ、帰りなさい」

「そうはいきません!私は護衛として……」

「団長に報告するわよ」

「ぐっ……失礼します……」

そうやって俺を睨んでから去っていくクラデイル。
ええ………なんで睨まれたん?俺。

「それじゃ、いきましょ?」

「お、おう」

階層を跨いでアスナの部屋のある61層までやってきた。

「おお！隠居生活にうってつけ、って感じの落ち着いたところだな」

「気に入った？」

「おう！ここ、いいところだな」

「それじゃあサイトマ君もここに住めば？」

「金が足りねえよ……」

装備品等にお金を回し、ギルドにも所属していない俺は、ぜんぜんお金が貯まらず、割とカツカツな生活を送っている。

「それにしても、良かったのか？あいつのこと」

「……最近、幹部には護衛が付くことになってるの。いらないうって言ったんだけどね」

「護衛ねえ……」

俺からしたらストーカーにしか見えなかったが。

「昔はこんなんじゃないかったの。どんどん人が増えて、最強ギルドなんて言われ始めてから、おかしくなってきた」

「大丈夫なのか？」

「……まあ、大したことじゃないから、気にしないでよし！早くいかないと日が暮れちゃうわ、いそぎましよう？」

「ああ、そうだな」

本当に大変そうだったら、どうにか手助けしてやりたいな……

「お、お邪魔しまーす」

女性の家に入ったことなんてなかったため、緊張が隠せないまま、アスナの部屋に入る。

部屋には、観葉植物や花、汚れの付いていない白い壁紙、高そうなソファアールなど、高級感がありながらも落ち着けるような内装になっている。

……いい匂いが、つと、これ以上は変態の称号をいただいてしまうな。

「なあ、ここっっておいくら万円したんすかね？」

「んー、土地と内装とで大体400万コルぐらいかな？」

「よ、よんひやくまん……」

やっぱ大手ギルドの副団長ともなると、こんないい家に住むのは普通なんだろう
か…

「それじゃあ着替えてくるから、ちよつと待っててね」

「お、おう」

女の子から着替えてくるときいて、ドキドキしない男がいるのだろうか、いいや、居
ない！（唐突な反語）

アスナが別の部屋に行くと、俺はソファアに腰を掛ける

座った瞬間に腰が沈みこみ、それでいて体に負担を掛けないようになってる。

これはまさしくソードアートオンライン内の人をダメにするソファアだ!!!

そんな事を考えていると、アスナが帰ってくる

は？肩チョイ出しのホットパンツとか、男がいる時の格好かよそれ。

エツツツツツツ

呆けた顔でアスナを見てると、話しかけてくる

「そんなに見られると、恥ずかしい…かな？」

「す、すまんー！」

ヤバイだるお!!

顔を少し赤くしてそんな事言われたら、男心鷲掴みされまくりなんですすが!?!?

「というか、いつまでそんな格好してるつもりなの?」

そう言われ自分の服を見てみると、ダンジョン攻略用の防具たちを装備し、剣を携えたままの姿だった。

ま、まあ、人様の家でする格好じゃないわな。

そうかんがえ、普段着へと着替える。

す。
キッチンに向かった俺とアスナ。俺は、ストレージからラグーラビットの肉を取り出す。

「これが伝説のS級食材かあ、それで?どんな料理にするの?」

「あー、何も考えてなかったなあ……お任せ、でいいか？」

俺は恐る恐る、といった感じにアスナに聞いてみる。

お母さんに『夕飯は何でもいい』とか言うのとブチギレされてたからなあ。

と、思い出していたら、アスナから提案がきた。

「それじゃあ、シチューにしようかな。ラグー、煮込むって意味だしね」

「へえー、物知りなんだな」

じゃあラグーラビットって、煮込みウサギって事か？

なんかグロいのしか想像できないんだが……

変なことを考えていたら、すでにアスナが包丁を構えていた。

その包丁を食材たちに当てると、食べやすそうなサイズに切り分けられていく。

「ほお……魔法みたいだな……」

「本当はもっと手順があるんだけどね。SAOの料理は、簡略化され過ぎていてつまら

ないわ」

「なるほどなあ」

「つてことは、アスナは現実世界でも料理してるってことだよな？」

美少女が料理してるって、夢物語だと思ってたけど、実際に存在してたのか……

まあ、そんな状況を堪能させていただいてるんだけどね!!!

「つと、これでシチューはオツケーで……あとは付け合わせね」

「そうこうしてる間に、シチューの下準備は済んだようだ。」

「にしても、速いもんだなあ……」

「よしっ、完成」

「おお！できたのか！」

「ええ、自信はあるわよ」

そういつて、シチューの入った鍋を開けようとするアスナ。その手元を、集中してみてしまう。

蓋が開けられると、そこからは、アツアツな湯気と、美味しそうなシチューの香りが漂ってくる。

その食欲を掻き立てられる匂いに、自然とよだれが出てくるように感じる。

「それじゃあ頂きましょう?」

「あ、ああ。そうだな」

ご馳走を目の前にし、心臓が躍る。

「いただきます!!」

「ふう……ご馳走様でした!」

「ふふつ、お粗末様でした。それで？どうだったかな？」

「ほんつとに旨かったよ！バトル以外でこんなに集中したのは、はじめてかもしれないな」

「そう言ってくれると作った甲斐があるわ。あ、お茶飲むかしら？」

「おう、いただく」

会話を交わした後に、アスナからお茶を受け取る。

てか、ポットの中に花とか浮いてるんだけど。

絶対お茶って言うより「ティー」って言った方が正しいタイプの奴じゃん。

めっちゃオシャンティーなんですけど。

作る人によって、食卓ってこんなに雰囲気変わるもんなんだな……

「S級食材なんて、二年も過ごして初めて食べたわよ……」

「ああ、俺もだ。アスナに料理してもらって本当に良かったよ。他人の手料理なんていつ振りか……」

「そ、そう？まあ、褒めてもらって悪い気はしないけど」

そういつて頬を染めるアスナ

お茶を一口飲み、口の中を潤した後、アスナが話しかけてくる。

「何だか不思議ね、この世界で生まれて今まで育ってきた。最近そんな風に感じることもあるの」

「なんだかそれ、分かる気がするわ。俺もあつちの^現世界の事^実を思い出さない日が増えてきた気がする」

そういつて、最近の事を思い出す。

攻略は前向きに行っているが、現実に戻りたいという気持ちは、薄れてきている気がする。

なにもそれは自分だけじゃない。

周りの奴らも、クリアに全力なやつが減ってきている。

惰性で攻略に臨むやつが、確実に増えてきている。

「今最前線で戦ってる人たちなんて、500人もいないでしょう。皆馴染んできているよ、この世界に」

「……」

馴染む……か、その表し方が一番合ってるように感じるな……

「それでも私は帰りたい。あつちにやり残したこと、いっぱいあるもの」

「……… ああ、そうだよな」

まだ成人も迎えてないし、親孝行も全然できてない。

なにより、なんでこの世界にやってきたのかもわかってないからな。

死ぬわけにはいかないな。

「ここで俺たちが頑張らなきゃ、下の階層で待つ奴ら、支えてくれる職人たちに、申し訳がたたないもんな」

今まで出会ってきた人たち、サービス初日に広場に集められた人たち、いろんな人の顔を思い浮かべる。

すると、

「あ、やめて」

そういきなりアスナに言われる。

暗い話は嫌だったか？

でも、アスナ自身も話してた気が…

「今までそんな顔をしたからは、何度か結婚を申し込まれたわ
!!?!」

全く予想してなかった類の言葉が飛んできて、俺はゴホゴホと、むせてしまった。

「ふふっ、その様子じゃ、他に仲の良い子、居ないでしょう？」

「う、うるさいわい！仕方ないだろ、ソロ活してんだから…」

恥ずかしさから語尾は小さくなってしまった。

からかうような顔から一転し、アスナの顔が険しくなる。

「サイタマ君はギルドに入らないの？仮面ライダーだっていう、他の人にはないスキルがあるのは分かっているけど、70層になってきてからモンスターは格段に強くなっているわ。一人だと対処しきれない事もあるでしょう？」

「安全マージンはしつかりとつてるし、複数人だと俺のスキルが上手く使えなかったりするから、逆に邪魔というか……」

「そこまで言ったところで、いきなりアスナからナイフを突きつけられる。」

「あ、あの、なんで殺されそうなの？俺」

「こんな攻撃も対処できないのに、他の人は邪魔だとしても言うの？それに、キリト君と結構レベリング行ってるみたいじゃない」

「あー、はい。アスナとキリトは例外ってことでお願いします」

「よろしい。つてことで、久しぶりに私とコンビ組みなさい。噂の仮面ライダーさんと一緒に戦ってみたかったし」

「はあ?!いい、いやでも、ギルドは「うちはレベル上げノルマとか無いし」……」

「じ、じゃああの護衛は「置いていくし」……う、うーむ……」

他に理由づけできないもんかねえ……

そう思い、カップに手を伸ばすが、中身はもう空だった。

チラッとアスナの方を見ると、ティーポットを持ちながらニヤニヤとこちらを見てい
る。

くツ、恥ずかしいが、おずおずとティーカップをアスナに差し出すと、おかわりをく
れる。

……
おいしい

カップに口をつけると、アスナからパーティーの招待がくる。

「……俺、キリトと約束が「許可はすでに取つてあります」……」

もうどうしようもなくなった俺は、おとなしくパーティーに参加することにした。

「一応お礼を言っておくわ。今日は()馳走様」

アスナの部屋から出て、帰ろうとしたところ、そう話しかけられた。

「こつちこそ、美味しい料理を作ってくれてありがとうな。またお願い、って言いいたいが、S級食材なんて、もうお目にかかることはねえだろうな」

「あら、普通の食材でも腕次第よ?」

「その通りだ」

そう言つて二人で笑みをこぼす。

するとアスナがそれを見上げたため、俺も追つて空を見上げる。

そこには、現実でも見たことが無いような、澄んだ星空が浮かんでいた。

「こんな世界が、茅場昌彦の望んだ世界なのかなあ……」

そんなアスナの眩きは、夜の空へと吸い込まれていった